諏訪の神さま

瓦もすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

諏訪の神さま

【Nコード】

N0988V

【作者名】

瓦Vもすけ

【あらすじ】

竹田春信十七歳は、ミシヤグジに喰われ、戦国時代の諏訪へと迷い込み、諏訪頼重の娘、さや姫と出会った。

史実に於いて、武田信玄が諏訪を攻め滅ぼしたのは、彼が家督を継いだ次の年である。諏訪はまさにその滅びの年を迎えていた。元の時代に帰る手段を探しながら、春信の戦国生活が始まる。

001、序 竹田春信

高校剣道。

インターハイ、個人戦決勝は。

二年連続、同じ顔合わせとなった。

互いに剣先を付き合わせ、蹲踞の姿勢で向かい合った。

「初め！」

の合図と共に、

「きえええええええええつ！」

対戦相手、坂本京介は絶叫しながら、しかし後に下がって間を空けた。

「おおおおおっ！」

竹田春信は、擦るように足を前に運び、じりじりと間を詰めていく。

互いに中段の構え。

互いに、構えに隙はない。

が、隙は打ち込んで作るものだ。

春信は風を巻くように踏み込んだ。

185センチの上背、背筋をしっかりと伸ばしたまま、

「めんっ！」

坂本が受けたところを、「こてっ！」「さらに「めんっ！」

竹刀が上がったところを、

「どっつ！」

鋭い連打に、坂本の足がややもつれる。たまらず距離を取ろうと坂本は下がった。

「どっつー！」

がら空きとなった胴を、強くなぎ払っていた。
小手の時点で、赤い審判旗が三本、高々と上がっていた。

たぐい希な資質、恵まれた環境。

剣聖の孫にして、剣鬼の息子。

100年に一人の天才剣士。

それがメディアの誇張であることを、鈴蘭高校三年、竹田春信は自覚している。

それでも、小中高、公式戦で無敗。

同年代で彼が群を抜いた剣士であるのもまた、事実だった。

時刻は夜の八時を過ぎていた。

竹田道場の窓から、照明の明かりが漏れている。

これから、高段者クラスの練習が始まる時間だった。

竹田春信のじいちゃんこと、剣道界の大長老、竹田陶治たくちを先頭に、化け物みたいなおっさんたちが、畳の上にはずらりと正座している。

しんつと伸びた背筋。彼らには座っているだけで侵しがたい武人めいた貫禄がある。

小学一年の時に両親を亡くした春信にとって、彼らは皆、父のような、兄のような、師匠のような存在だ。半数ほどには勝ち越せるようになったが、それでもまだまだ教わることは沢山あった。

その師匠たちの正面で、竹田春信も正座しながら、深々と頭を下げた。

「インターハイ、三連覇、達成できました。これもひとえに皆さん

のご指導のおかげです。どうも、ありがとうございました！」

いかめしい顔を弛緩させ、おっさんたちが盛大に拍手する。

「おめでとうっ」「調子にのるなよっ」「恋ちゃん泣かせるなよ！」
ほうぼうから声も上がった。

春信にとって彼らが兄であり師匠であるその逆で、彼らにとって春信は弟子であり、息子や弟、孫にも等しかった。

春信は照れくさそうに笑って、かるく頭を下げ直す。

同世代では常勝無敗の竹田春信だ。

祝われるのも恒例行事となっている。

それでもやっぱり、師匠たちに祝福されると、とても嬉しく、誇らしい気持ちになる。

師範であるじいちゃんが、あごを引いて頷く動作。

それを合図に、しんっ、と道場に静寂が満ちる。

重々しく、じいちゃんが口を開いた。

「春信よ。感謝は言葉ではなく、行動でしめらねばならない」

(……だから今こうして頭を下げてるんだけど?)

気持ちが入っていない、と言うことだろうか。

言われてみれば、そうかもしれない。特に今年はすべての大会で圧勝し、もの足りない気持ちを抱えていた。それが傲慢となって、態度に表れていたのかも。

春信は一人で強くなったわけではない。

年代も特徴も違う達人たちに鍛え上げられ、今の春信の強さはあるのだ。

背筋をぴんつと伸ばし、表情も改める。感謝の気持ちを心に満たせて、

「どうも、ありがとうございました！」

声を大きくし、両手をついて、深々と頭を下げるも。

「たわけっ。十年二十年の恩義、たった一度や二度頭を下げただけで、返せるとでも思ってたか！」

じいちゃんの叱責。

春信は、大きく息を吸い、

「どうも、あっ」

「たわけっ！」

言い終わる前に叱られた。

「十年二十年の恩義、頭を下げただけで返せるとでも思ってたか！」
言葉の中から、一度や二度が消えている。

「……」

「……」

「………じいちゃん。俺、まだ一七歳なんだけど？」

じいちゃんは、ごほんと咳払いして、

「たわけっ！ 一七年ちよっとの恩義、頭を下げただけで返せるとでも思ってたか！」

律儀に言い直した。

おっさんたちも、じいちゃんに同意するように、揃って頷いている。いやがる。

(……難癖だな、これは)

春信は確信する。

いつものパターンだ。

言葉だけでは駄目、頭を下げるだけでも駄目、行動で示せ、つまりは何か春信に頼み事があるわけだ。そしてじいちゃんや師匠たちが揃ってとなると、要求の内容も、あいつのことに決まっていた。

「じゃ、俺はこれで。学校の課題が溜まってますので」

すっと自然に立ち上がり、愛想笑いで立ち去ろうとするも、

「まあ、待て。春信よ」

朗らかに笑うじいちゃんに腕を掴まれ阻止された。

「……いや、学業でちよつと遅れがあるから」

「今は夏休みぞ？」

「だから、その夏休みの宿題がね」

「まあ待て。どうせお前、道場つぐんだろ？ 宿題なぞより大切な

話が、じいちゃんにあるから」

「宿題なんぞって……」

両親を亡くした孫を養育する祖父の言葉としてどうなんだろうか。

「また、恋になんか頼まれたんですか？」

「うん」

嬉しそうにじいちゃんが頷く。

竹田恋。我が妹だ。

「……じいちゃん、ちよつと恋に甘すぎないですか？」

「うん」

「……いや、うんじゃないでしょ、うんじゃ」

「感謝は行動で表さなければならぬ！」

じいちゃんが叫び、みんなが揃って頷いた。

彼らにとって竹田春信は弟子であり、息子であり、弟や、孫だった。

そして竹田恋は彼らにとって、娘であり、孫であり、お姫さまだった。

春信はとほほと座り直した。

002、序 祟り

セミの騒音がすごい。

うっそうと木々が茂っている。

おかげで町中よりは涼しいが。

公衆トイレで用を足して、竹田春信はぶらりと辺りを散策する。

場所は諏訪大社。

上社の前宮である。

名門剣道道場の長男に生まれ、ひたすら剣の道に生きてきた春信は、良くも悪くも体育会系・武道系の人間で、上下の関係を重視する。

さらには同年代とやれば必ず勝ち、しかし大人たちには敵わなかった。その落差が、より目上への尊敬を強く成長させていた。それは増長しないよう自らへの戒めにも繋がったが、押しの弱さにも転じていた。

師匠たちに頼まれると、断れない。

妹に泣かれても、断れない。

竹田道場では、

妹 じいちゃん おっさんたち 春信

というヒエラルキーが確立していた。

中学校までは、

妹 じいちゃん おっさんたち 春信 妹 じいちゃん

と、循環が成り立っていたのだが、齡を重ねる内に春信の発言力が弱まり、妹のわがママが帝国を築き始めていた。しかしいくら何でも、これはひどい。

「どんな罰ゲームだよ」

妹と二人きり。

よりによって信玄古跡巡りだ。

黒川金山や信玄堤、武田神社や川中島。

この数日、信濃の名所を嫌と言うほど引つ張り回されていた。最後の宿泊地が、この諏訪である。

すでに剣道部の仲間にも、妹が所属するスポーツチャンバラ部の仲間にも、二人の旅は、知れ渡っていた。

恋が写真をメールで送りまくるからだ。いつもながら困った妹である。

高島城。

上原城跡に桑原城跡。

上社の前宮に本宮。

下社の春宮に秋宮。

八劔神社や手長神社、御射山社などなど。

諏訪地方には狭い範囲に小さな城跡や神社が散らばっている。

朝から昼、昼から夕と、行ったり来たりしていた。

妹の恋という名は、諏訪の湖衣姫から拝借されている。

未だそのリスペクトに余念のない妹は、昨日までの観光旅行気分が嘘のように、神職のおっさんや巫女さんを捕まえては質問攻めにしていた。

春信は隙を見て、逃げてきていた。携帯に連絡が来るまでつかの間の休息だ。

左足を前に出し、諸手上段に構える。

竹刀を、いや、日本刀を握っているつもりで、右足を踏み出し、一直線に斬り落とす。

次は下段に構え、見えない相手の小手を打ち抜く。

暇を持て余すと、シャドー剣道を始める癖が、春信にはあった。

諏訪大社の大明神は香取大明神、鹿島大明神と並んで、勝負を司る三柱の神とされている。

武士の崇める軍神だ。

だが剣道少年である晴信は、ただの一度も、諏訪で手をあわせたことはなかった。

鹿島や香取ならいくらでも敬意を表するが、諏訪では祈らない。

理由は単純。

諏訪の祀る神、たけみなかた建御名方が、負け犬だからだ。

侵攻してきた建御雷神に打ちのめされ、逃げて追いつめられて、

泣いて土下座して、「二度とこの地から出ないので見逃して」と許し

を請うて、約束のままに諏訪の地に引きこもる。

そんなのは武人じゃない。武人の祈る神じゃない。

祈る価値はない。

負ける戦でも命を捨てて立ち向かう。

斬られるときでも背中は見せない。それが武人だ。武人の神はそうあるべきだ。そんな思いが心にあった。

「負け犬め」

口について毒が出る。

見えない相手の、面を切り裂く。

知らず知らずのうちに、その相手に建御名方を投影していた。

だいたいからして、春信は武田信玄にまつわる諸事万端が大嫌いだった。

武田信玄をリスペクトしていたのは、小学生の高学年までで、と

にかく消し去りたい黒歴史の山である。中学2年の夏以降はその反動から武田信玄に係る事柄は、憎悪の対象となっていた。

溜まりに溜まった鬱憤をシャドー剣道の合間に発散する。

触らぬ神に祟りなし、という言葉がある。

『 さつきから君、うるさいね 』

突然の呼びかけに、春信は慌てて振り返った。

『 誰が負け犬だった？ 』

「 …… なんだ、おまえ？ 」

春信が身構える。

蛇がいた。

頭のでっかい、白い蛇が、とぐろを巻いて、晴信を睥睨している。

半透明の躰。

蛇の向こうに、諏訪の森が透けて見えている。

(なんだ、こいつ。化け物か？)

『 神さまだよ 』

(…… 心を、読んだのか？)

『 当たり前だろ？ 神さまなんだから 』

(……)

『 負け犬負け犬って。神の聖域で、きみ、本当に罰あたりだよ。 』

君を通して、世界中の嘲笑が流れ込んでくるようだ。おちおち寝ても居られない 』

「 …… す、すみません 」

『 あれ？ 意外と素直だね？ 』

蛇が馬鹿にしたように嗤った。

つい謝ってしまった自分に対し、腹が立った。

(負け犬相手に)

「 …… 負け犬 」

口に出して呟いてやる。

『……だから僕、この時代嫌いなんだよ』

神さまがため息を吐いた。蛇のくせに器用だった。

「……うるせ、負け犬」

『……………』

蛇が黙った。

(……よし、勝ったか?)

口げんかに。むなしい勝利だった。

ぼそりと、神が呟いた。

『しんじやえ』

短気な神だった。

実力行使に出てきた。

「なっ」

ぐわんつと、蛇が巨大になったように、見えた。

(いや、本当に大きくなってやがる!)

ライオンの頭ほどにもなった白蛇の頭部が、春信を一飲みにしよ
うと迫る。

剣道の足捌きで、春信はそれを回避する。

なんというか、蛇神さまの動きは遅かった。

ほっとしたのもつかの間、振り返った蛇がまたぐわんつと大きく
なる。

『鈍足で悪かったね!』

「いや、言ってないし!」

今度は象の頭ほどになっている。

「うわっ!」

迫り来る白蛇を飛び退いてかわす。

「おい待て蛇! 話せばわかる!」

『……すごく、むかつくよね、きみ』

蛇が青筋を立てた。蛇なのに。

『さつきから蛇じゃねえ。竜だ!』

ぐわんつと、竜と主張する蛇の頭部が、鯨ほどの大きさになる。

「でかつ!」

尻ポケットで、携帯電話が鳴っている。

出る余裕などない。

家を一飲みに出来そう蛇の大口が迫る。

背を向け春信は逃げる。

大木の陰に身を隠す。

半透明の蛇の巨体は、障害物の大木を次々素通りして迫る。

(まじか!?)

『残念でした』

「待て! 神様! お賽銭あげるから!」

春信の目前、ぴたりと、神さまの動きが止まった。

必死で、ポケットをまさぐる。神社めぐりを続けていたので、お

賽銭用の小銭を直接、ズボンの前ポケットに放り込んでいた。

ポケットからは……よれよれのコンビニのレシートと、一円玉が

数枚、出てきた。

(……あっ、そついや、諏訪に来てからお賽銭は、一円にケチって

いたなあ)

それも一回、入れただけだ。なんか勿体なくて。

心を読まれたようだ。

ぐわんと蛇がまた大きくなり、青筋を立て、

『死んじゃえ!』

蛇の大口が、春信を呑み込んだ。

(喰われた！)

何も見えない。

何も聞こえない。

何かを叫んでいるつもりなのに、その声が聞こえない。

身体を動かしているはずなのに、その感触がない。

心はあるが、身体がない。五感が完全に消失していた。

心の中にも、空っぽの何か染み込んでくる。

心が薄まり、何も無い周辺に、拡散していく。

世界に、消化されていく！

焦る心すらが、まあいいや、という虚脱した諦めに飲み込まれていく。

無と同化しかけた時、誰かの、声がした。

誰かが、呼んでいる。

誰かが、助けを求めている。

春信は、心の意識をそちらに伸ばした。

心が暖かい 何か に触れ、ぐおんつと、 何か に惹き引き寄せられた。

誰か が、腕を掴んだ。掴まれたことで、腕が腕となって復活していた。

優しい 誰か に包まれた腕から、五感が覚醒していく。

光る扉を潜ったのか、春信自身が発光したのか。

暖かい光りに全てが包まれ、無上の喜びの中、春信は、生まれ落ちた。

003、顕現ノ章 英雄顕現

年の頃、11歳。

四尺五寸の身長。

小さな身体が、躍動的に跳ねている。

少し大きめの白い小袖に、朱袴が、ふわふわと踊っている。

この諏訪の地を支配する諏訪頼重の長女、さや姫さまである。

季節は冬を終え、春に差し掛かっているが、朝はまだ冷える。

さや姫の頬は桜色に染まり、口からは靄のような白い息がふわふわと漏れている。

ハキハキした動作一つ一つに、愛嬌があった。

新芽もまだの森の中であって、まるでそこだけ花が咲いているようだった。

彼女のすぐ後を、同じ歳ほどの少年が寒そうに手を擦りながら、ついて行く。二人の周りを、五人の侍が、軽装で護衛していた。

一行が本殿の側を通ったときだった。

弓弦が鳴った。

音に気づき、護衛者たちが身構えたときには、三人が射抜かれていた。

格子状になった本殿の戸を蹴破って、四人の刺客が飛び出してくる。

あつという間の出来事だった。

森の奥で待ち伏せていた刺客も加わり、一人二人と護衛者は挟み撃ちになって屠られていく。

「姫さまを！」

矢で射抜かれながらも護衛者の一人が声を荒げ、腰の太刀を抜き放つ。

「こちらに！」

神主の少年が、姫の手を取り、駆け出している。

襲撃者たちは退路を断つよう、二人を追い込んでいく。

子供の足だ。

容易く追いつかれた。

少年はさや姫の手を離して、刺客に体当たりを試みた。

しかし正面から受け止められ、びくともしない。刺客は少年を受け止めたまま、緩やかに狙いを定めて、剣を振り下ろす。

少年の足を、撫でるように刃が走った。

太ももの付け根から膝の下まで斬られ、少年がうずくまった。

非武装で、まだ子供であり、さらには神職だ。いや、それとも何か意図があるのか、その刺客はあえて彼にトドメを刺さずに、姫の捕縛に向かおうとした。

「姫さまっ！ お逃げくださいっ！」

少年は叫び、刺客の足に両腕を絡ませて、僅かな足止めに命を捨てた。ただし、無駄な足止めだ。すでに護衛は皆殺しにされ、姫は神原廊の長い外壁に追い込まれて取り囲まれていた。

少年を見下ろす刺客が不快気に眉をひそめ、無造作に刀を振り上げた。

その時だった。

虚空を掴むさや姫の両の掌から、光があふれ出た。

光は、瞬き一つの間にも人の腕となり、腕から更に光が、人の形に走っていく。瞬き三つで、光はすべて収まった。

収まった後には、一人の長身の若者が出現していた。

目も眩む光を通過して、春信の五感は完全に復活していた。
右手に柔らかい感触がある。

春信はその手を見下ろした。

巫女の格好をした少女が、春信の右手を両手で握りしめていた。

呆然と少女を見下ろす春信に、少女もまた、目を見開き春信を見上げていた。

ひんやり肌寒い空気が、むき出しの上腕を撫でる。

不快な臭気が鼻をくすぐる。

異様な気配を感じ、春信は少女から顔を上げて、辺りを見回した。
右手側、触れられる距離に、神社らしき古びた壁がまっすぐに伸びていた。

残る三方向は、靄がただよう、薄暗い森となっていた。

その森で、血塗られた日本刀を構えた異様な集団が、半円陣で春信と少女を取り囲んでいた。

黒塗りの兜を被り、いかめしい面頬で顔を隠し、全身に具足を着込んでいた。

面頬の隙間から、ぎらぎらとした視線が、春信に向かい放射されていた。

あまりの事態に春信の喉がぎゅっと縮まり、顔が歪む。

蛇神の次は、武者の集団。

それもいきなり、追いつめられている。

これは夢か、現実か。

「……何者だ、きさま？」

武者がしわがれた声を出した。

「たけだ竹田、はるのぶ春信」

ひりつく喉に唾を流し込み、名を答える。

その名が持つ意味を考える余裕などなかった。

ほんのわずか、きよとんとした後、

「……おのれっ！」

「……きさまっ！」

凶漢たちは、怒気を露わにした。

まるで自らの怒りに背を押されたように、一人の武者が上段に高々と剣を振り上げ、春信を斬れる間合いに踏み込もうとした。

その瞬間、春信はすがりつく少女を振りほどき、大きく前に飛び出していた。

咄嗟の判断だった。「今から斬るぞ、受けてみよ！」と予告されていたら、足がすくんで動けなかっただろう。何万、何十万と繰り返してきた剣道の稽古が無心のままに現れ、それが春信の命を救った。

武者が振り落とすより速く、春信の両手が日本刀を握る手甲に包まれた手を抑えていた。

「……！」

相手が絶句する。

前進しあつた両者の身体がぶつかると、がちゃがちゃと鈍い金属音が鳴り響く。

春信の体格は、185センチ。

相手の身体は、170センチほど。

不意を突いた効果もあつたらう、武者は後に押し倒され、尻餅をついた。

血塗られた日本刀は、春信の手にもぎ取られていた。

「……なんなんだ、いったい」

今頃になって春信は呟いた。

木壁まで後退して、改めて周囲を見渡す。

鎧武者の人数は、七人。

春信のすぐ横に、先ほど手を握っていた巫女の格好をした少女が一人。少し離れた木の根本で、神主の格好をした少年が足から血を流して座り込んでいる。

二人とも、まだ十をいくつも出ていないような年頃だ。
生存が確認できたのは、七人の凶漢と、この二人だけだ。

斬られたり、矢が刺さった軽装の侍が、数人、森の中に横たわっている。

「おい、急げ！」

武者の一人が、苛立った声を上げた。

その声に押され、鎧武者の一団が、じりじりと間合いを詰めてくる。

春信の左側から、上段に肩口を狙って大振りの一撃が落ちてくる。
瞬時に春信は反応した。

得意とする対の先。

春信の日本刀が先に相手にとどいた。非現実的な状況で、やはり無意識のままに染みついた技が出た結果だった。最短の軌道を通して、日本刀が武者の手甲を打ち据える。

眠りから覚めたように、春信は目を見開いた。

手甲に包まれた指が、赤い血の筋を伸ばしてゆっくりと男から離れ、大地に散らばった。

人を斬った感触、春信の背筋に怖気が奔り、全身が震えた。

指を失い、太刀を取り落とした武者は身を屈めて、苦悶に呻いている。

だが襲撃者たちは、わずかしが怯まなかった。

残る武者は、右から左から春信に攻撃を仕掛けてくる。

突きかかってくる剣を、半身に退いてかわした。振り落とされる剣を、刀身で受け止めた。脇からの刃は、避けきれずに右腕をかすめた。

（斬られた！）

かすり傷だが、リアルな痛みが走った。

相手は具足を着込んだ武者たちだ。

それが三方から代わる代わる襲ってくる。

(くそっ、なんだ。なんだってんだっ、くそっっ！)

反撃しなければ、殺される状況。

躊躇している余裕はなかった。

右から斬りかかってくる武者に踏み込み、鉄籠手の上腕めがけ、力任せに刃を叩き付けた。籠手がひしゃげ、武者は太刀を取り落とす。春信はすぐに反転、背後から斬りかかろうとしていたそいつにも、同じように 対の先 で 小手 をお見舞いする。

たとえ防具の上から竹刀で叩いても、綺麗に入れば腕がしびれる。青痣だつて出来る。それが、鋼の日本刀だ。鉄籠手の装備で切断は防いでも、衝撃で骨くらい砕けるだろう。実際、彼らの腕は不格好に曲がっていた。

三人が無力化され、残る武者は、四人。

さすがに遠巻きとなつて、仕掛けてこなくなった。

「しかたない。殺すぞ」

今更のように武者の一人が命じた。

じりつと、男達がまた間合いを詰めてくる。

殺す、とはつきり口に出され、春信の心に恐怖が染み込んでくる。

彼らの剣は、しかし春信に向いては居なかった。

木壁にもたれ、腰を抜かしたようにべったりと座り込んでいる少女に向かって、一人が走った。

(まさか！)

立ち塞がった武者の胸をなぎ払ってぶっ飛ばし、春信も飛ぶように駆け寄る。

少女の脳天に振り落とされる凶刃を、間一髪、横から刀を出して受け止める。

「ふっ、ふっざっけんな、お前ら！」

大音声で怒鳴った。

剣を手にした大人が、無抵抗の少女にその剣を振り下ろす。ここが夢でも現実でも、見過ごせることじゃない！

「もう容赦しねえ！」

凶刃を振り下ろした武者の肩口から、真剣を叩き込む。

白刃が鎧の肩当てを滑り、肩胛骨をへし折り、肩胛骨の下から肉を切り裂き、革の胴丸を半ばまで断ち斬った。

「来い！」

残る武者に、剣を突き出し、春信がすごむ。

「…化けモノめ！」

武者は歯ぎしりした。

しばらくにらみ合った後、

「……ひくぞ」

春信を警戒しながら、手負いの仲間を介護しつつ、武者達が退いていく。

004、顕現ノ章（庇護）

虚脱したように、春信は立ちつくす。
それも、数秒程度だった。

「よ、ようこそ参られました。たけみなかたの君よ。礼を言いません。
ありがとうございます！」

嗚咽混じりの声をかけられ、振り返った。

「……だらだらと泣きながら、巫女装束の少女は立ち上がるつとし、ど
すんと尻餅をついた。」

「ふにゃ！」

と変な声を出してから、

「……腰が抜けています。足もひねってました」

恥ずかしそうに、告げた。

涙に濡れた頬はもとより、耳まで赤くなっている。

「あの……。ごめんなさい。抱きかかえて……。いただけません
でしょうか？」

両腕を前に出し、はにかんだ。

春信は請われるままに少女をお姫さまだっこし、負傷した少年の
元に運ぶ。

少年もすでに泣きはらし、目を赤く充血させている。

「あなたが何者かは存じませんが、姫さまをお助け頂き、感謝の言
葉もございません。お礼は必ず、神殿さまから下されるはずで

姫さまを是非とも安全なところまで、どうか上社本宮までお連れくださいませ」

少年は早口でまくし立てた。

上社本宮まで……ということやはり此処は、諏訪の上社前宮だろうか？。

しかし春信が蛇神に襲われる前にいた前宮の杜とは、気温も湿度も明るさも、何から何まで決定的に違っていた。

春信は少年の脇にしゃがみ、足の傷を見る。

太ももの付け根から、膝の下までざっくりと斬られていた。

ただ、さほど深くはなく、動脈などは傷つけていないようだ。

早急に手当をすれば、命を落とすことはないだろう。

春信は着ているシャツを脱ぎ、落ちていた刀で、带状に引き裂いた。

少年の太ももをぎゅっと縛って圧迫して、止血する。

「急いで、姫さまを上社本宮まで！」

「姫さまは捻挫しているだけだよ。他にも怪我人がいるようだから、すぐに手当しないと」

春信は倒れている人々の生存を確認してまわった。

息のある者は一人もいなかった。

「はやく、はやく姫さまを安全な場所に！」

苛立ったような少年の懇願。

「君の方が怪我が大きい。君を先に」

「馬鹿なこと言わないでください！ 奴らが体勢を立て直して戻っ

てきたらどつするんですか!？」

少年の絶叫に遮られた。

「しかし、君は」

「大丈夫です。奴らの目的は姫さまです。俺なんて殺す価値も掠う価値もありませんから。はやく！ お願いします。姫さまよりも俺なんかを優先したら、この場で舌をかみ切っても死んでやりますよ！」

血相を変えた剣幕。

春信は絶句する。

大人にはなりきれない体格の、少年と少女だ。

春信の体力なら、一人を背負って、一人を抱えて移動できないこともない。

ただ少年は足に深手を負っている。乱暴に扱うと相当痛むし、傷が大きく開きかねない。

慎重に運ぶとなると、少女を背負いながらでは難しいし、時間も掛かる。

そう考えれば、いつそ姫さまを背負って走り、助けを連れて戻った方が、少年にとっても少女にとっても最良の選択か。

「神社のどこかに、この子を隠せるところはないですか？」

春信は少女に向き直った。

「あの神原廊の中の隅なら、人目につきにくいです！」

少女が、細い指で、すぐ側にある長い壁の一角を指さした。

「そこに、この子移します。ちょっとだけ、待っていてくれませんか」

少女が強く頷く。

抱えようとする少年が、

「僕のことは放っておいて、はやく姫さまを
暴れようとする。」

「雷太」

と姫さまは少年に呼びかけ、両手で包むように優しく右手を握った。

「お願いだから、困らせないで。すぐに迎えをよこします。だから大人しく、待っていてくれますよね？」

「……はい」

少年が、泣きながら頷いた。

足下は、ほどほどに整地された剥き出しの土道。

少女の指示に従い、ひた走る。

少女の息が、春信の右頬にあたっていた。

少女の細い両腕が、春信の首に食い込んでいた。

少女は覆い被さるようにして、春信にしがみついている。

正直、くすぐりたいし、息も苦しいが、仕方がない。

シャツを包帯代わりに引き裂いて使ってしまったため、今は上半身裸だ。

少女だつて掴まる場所に苦勞する。

余計な上下動を押さえ、前屈みになって落とさないよう気を配る。

一度走り出すと、気持ち逃げ感覚に囚われる。

頭の中、鎧武者の追ってくるイメージがわいてくる。振り返ればそこに居るような圧迫感。

恐怖に怯えながら、それでもペース配分を考え、走る。本宮と前宮の間は、恋と一緒に今日歩いたばかりだ。

2キロ程度のはずだった。

息を切らせて、山道を掛け進む。

道の両側は深い森で、見通しは悪い。

その森が僅かに途切れ、春信の目前に寺社群が見え始めた。

まず最初に現れたのが、神社には場違いな、五重の塔だ。

そこで足を止めた春信の耳元で少女が口を開く。

「もう少しです。この先に仁王門があり、そこが上社本宮です。そこならたくさん人がいます」

短い会話の間に息を整え、もう一度走り出す。

くすんだ白壁が見えてきた。

開いている古びた木製の門を通過して、神社の敷地に。

塀の中は、いくつもの建物が密集し、町の様相を呈していた。

一人の神職と鉢合わせして、すぐに騒ぎに。

十人二十人と、そこらの建物から人が溢れてくる。

やっと助かったという実感がわいてくる。

「この方に危ないところを救われました。雷太が怪我をして神原廊に隠れています。みなさん迎えをお願いします」

集まる神職に少女が頭を下げている。

「俺も、行きます」

春信が口を挟む。姫を無事に届けたことを、あの子には直接伝えてやりたかった。それに、足の怪我也心配だ。

「担架……何か彼を寝かせたまま運べるものはありますか？」

ちょうど一人が乗せられるほどの戸板がすぐに運ばれてくる。

「待て！」

と厳しい顔をした神主の男が、春信を制止した。

「そなたは何者ぞ。見ない顔だが、どこから来られた？」

春信は返答に戸惑った。

まさか東京から電車で来ました、と正直に答えて通じるわけがない。

かといって旅人です、と誤魔化すにも、この世界の地理をろくに知らないのだ。京都や駿府など思いつく地名を上げたところで、そこから諏訪に至る街道や村、国の名前は分からない。問い詰められればすぐに嘘が張れるだろう。

「禰宜どの。この方は怪しい者ではありません」

答えに窮する春信を、姫さまが庇ってくれた。

禰宜と呼ばれた神主は、目を細めて春信の格好を眺めた。

上半身裸に、ジーパンとスニーカー。汗みずくで、荒い息を吐く、春信。

「……どこからどう見ても怪しい者ですが」

「……」

姫さま、沈黙。

「どこのどなたですか？ この方は？」

禰宜に尋ねられ、少女は困ったような視線で、春信を見上げた。彼女とて、春信が何者かは知っておらず、答えようがないのだ。

周りの者たちも不審そうに春信を窺っている。

その間にも、次々と武士や神職が門から外に押し出していく。春信が少年の救出に加わる雰囲気ではなくなっていた。

さあ、参った。未来から来たことを告げるべきか？

信用して貰えるか？ 信用して貰えたとしたら、どんな扱いになる？ 信用して貰えなければ、どんな扱いになる？

「その者を捕らえよ」

と神主は重い声を発した。

「いいえ、なりません」

と姫さまが制した。

「一時的な処置でございます」

「なりません」

少女が首を横に振る。長い黒髪がさらさらと舞う。

「時期と状況を考えなさいませ。この者が連中の仲間でない保証はありませんぞ」

「この方は刺客と渡り合い、わたしを救ってくださいました」

「それが演技でない保証は？」

「この方は、敵を斬って退けました。向こうに行けば、その時の証拠が残っています」

「策謀のためなら捨て駒を用意するなど、武田でなくとも平気でや

りましようぞ。神殿さまの指示を仰ぐまでの処置でございます」

深々と、禰宜は姫に頭を下げた。

唇を噛み、悔しそうに姫は沈黙する。

春信たちを取り囲む人の輪は、神職よりも武士が多くなっていた。皆、武器を手にしている。

仲間を殺され、姫を掠われそうになり、彼らは殺気立っていた。恩人なのか、それとも復讐すべき相手なのか。殺気の中に困惑を混ぜた視線が、春信に注がれていた。

「姫の恩人だ。丁重に、拘束せよ」

禰宜の指示で、武士たちはどこか遠慮しながらも春信に縄を打とうとした。

「やはり、なりません！」

姫さまが、金切り声を上げた。

「下社大祝であるわらわに指図したいのなら、せめて父を通してからにせよ！」

右腕をびしつと真横に振って、姫さまが主張し、片足で跳ねるようにして春信の側まで来て、武士を追い払った。

苦虫を噛みつぶした顔で、今度は禰宜が黙る。

険悪なムードに包まれた場に、

「あはははっ 困っているね、禰宜どの」
と楽しそうな笑いが響いた。

人垣を割って、まだ十四、五くらいの少年が歩み寄ってくる。露骨に、ますます禰宜は嫌そうに顔をしかめた。逆に、姫さまは顔を輝かせた。

「上社どの！ 庇ってください！」

「かまわないよ。ただ……」

と少年は大きな湖を挟んだ向こう、そびえる山城を見やった。神殿からの迎えが、すぐに来ると思うけどな

姫さまも遠い目で、同じ山城を見やる。

それから少年に向き直り、頭を下げた。

「一室をお借りします。わたしの話が終わるまでは、誰も通さないようにお願いします」

「それが通じる相手ならね」

「頼みます、叔父上」

「承知した、姪っ子よ」

少年は笑みを浮かべたまま器用に嘆息した。

姫さまは小さく舌を出して春信にはにかんで見せてから、

「では、参りましょうか」

言って、両手を前に突きだした。前にならえとお化けの真似の、中間くらいの肘の曲がり具合。その状態で、両手をひょこひょこ揺する。

春信は思い当たり、姫さまに背を向けてしゃがむ。

嬉しそうに小さな身体が乗っかってきた。

005、顕現ノ章 密談

どうやら今いる場所は、神社そのものではなく、神社に隣接する門前町のようだった。

町は、堀や堀によって、幾つかの区画に別れていた。

最初に入った商屋風の町並みを移動し、武家風の町をかすめ、寺社風の町に入る。

不思議な表現だが、門前町は 雑然と調和 が取れていた。

拡張と整備、消失と再建を繰り返しながら、在り続ける町の姿が此処にあった。

町の奥まった一画、城で言えば本丸に相当する箇所が、神職上層部の居住区となっていた。

その中央にある大きな屋敷に、姫さまを背負ったまま、春信は上がり込んだ。

春信は、手ぬぐいを借りて身体の汗をぬぐい、麻の小袖と袴も借りて、着用する。裾や袖が少し短い、その様な作務衣と思えないこともないし、贅沢の言える立場でもない。

畳敷きの一室に通され、二人きり、姫さまと向き合って座る。

姫さまの配慮で用意して貰えた火鉢がありがたい。長い間上半身裸でいたために身体が冷え切っていた。手をかざし暖を取り、やっと人心地がついた。

火鉢を間に置いて、春信は正座。

姫さまはくじいた足が痛いので、両足を伸ばしてベタ座り。

その状態で、ひよこと可愛く頭を下げる。

「危ないところを助けていただき、本当にありがとうございました」

「いや、こちらこそ、なんだか迷惑をかけているようで」

申し訳なさそうに春信も頭を下げる。

「迷惑などと、とんでもない！ とんでもないです！」

姫さまが目を丸くし、両手をわたわた振る。

後ろに転げそうになり、余計にわたわたする。

「あつ、あなたの助けがなければ、わたしはあの者たちに掠われていました。雷太も殺されていたでしょう。みんなも、うくっ」

何とか体制を立て直し、姫さま背筋を伸ばす。

「ここは叔父上の家です。叔父上は、上社の大祝を務めています。大祝は、存じておりましたでしょうか？」

「知ってます。確か、諏訪大社で一番偉い人……ですよね？」

過去の諏訪では、いわゆる神権政治が継続していた。

諏訪家はタケミナカタ神の血を引く神氏の一族であり、諏訪大社の頂点『大祝』は、必ず諏訪惣領家の人間が務めていた。

そしてその大祝はご神体として信仰の対象となっており、そういう意味では『偉い人』ではなく『偉い神さま』と呼ぶべきかもしれない。

「はい。この上社でもっとも偉いお人です。ここにいる限りは禰宜も神長官も手を出せません。あなた様もどうぞ、くつろいでください」

「いませ」

「はい。そうさせてもらいます」

春信は好意に甘え、正座を解いてあぐらを組む。

「あなた様について、わたしは多くのことを尋ねたいのです。あなた様は、何か尋ねたいことはありませんか？」

「先に聞いて、いいですか？」

少し、掠れた声になった。

「はい。もちろんです」

出会う方が、出会う方だ。何かを予感するのか、姫さまも、少し上ずった声。

「では、今の將軍さまは、誰ですか？」

「將軍さま？」

意外そうに、姫は少し首をかしげ、

「足利義晴さまのことでしょうか？」

……義晴？ 聞いたことはあるが、よく分からない。ただ、足利家の最後は義昭で、その前が剣豪將軍の義輝だ。それだけは戦国系のエンターテインメントを通じて勉強済みだ。となると、義晴は間違いなくそれよりは前。少なくとも、戦国後期にはまだなっていない。

「じゃあ、」

とストレートに聞いてみる。

「諏訪の、今の領主は誰ですか？」

「諏訪頼重。わたしの父上です」

この名は知っていた。

諏訪頼重は、諏訪家の最後の領主だ。

そして、湖衣姫の父だ。

と、いうことはこの子が湖衣姫か？　しかし湖衣という名は小説家の創作で、湖衣姫の実名は不明。この子に尋ねても首を傾げられるだけだろう。

いや、そんなことより、諏訪頼重が諏訪を統治していた時期は10年かそこらしかなかったはずだ。
嫌な予感を覚え、春信の顔が強ばった。

「……隣の、甲斐の支配者は、誰ですか？」

「武田晴信です」

……………。

今が、完全に特定されてしまった。

戦国時代の、とある重大な時期に。

この場所にとって、諏訪にとって、この子にとって、最悪の。

武田晴信が武田家の家督を継ぐのは、彼が数え年で二一歳の時だ。彼については、一時期リスペクトしていて、はっきり覚えている。

そして翌年、彼は、諏訪に侵攻し、諏訪家を滅ぼしている。

「武田晴信が家を継いだのは、今年ですか？　去年ですか？」

「去年です」

今年、数ヶ月の内に、この地は戦火に巻かれ、諏訪家は滅びるとんでもない時代に迷い込んでしまった。

蒼白な顔で黙り込んだ春信に、姫さまはため息を吐いた。

「誰でも知っているようなおかしな事を沢山聞かれました。やはり

あなた様には色々と思議な事情がおありのようですね」

姫さまは立ち上がるうとして足を引き、「うっ」と呻いて、足を伸ばした。

「そんなわけですので、」

まるでボートを漕ぐように、後ろ向きの姿勢で伸ばした足をかばいながら、姫さまが近寄ってくる。

とんつ、春信の脇に、到着。

背中を押しつけ、下からのぞき見るようにして、

「人に聞かれないよう、内緒話をいたしましょう」

目と鼻の先、顔をよせて、いたずらっぽく微笑む少女。

「あなた様のお名前をお聞かせください」
囁くような声音。

「……竹田春信です」

彼女の足に負担が掛からないよう、もたれかかってくる姫さまを支えるようにして、春信も囁くように答えた。

「……甲斐の武田晴信さまと、ご関係はあるのでしょうか？」

「無いです。強いて言えば、武田晴信の名前にあやかろうと、親が真似して付けました」

春信はごくりと唾を飲み込んでから、

「……信じられないと思いますけど」

未来から迷い込んでしまったようだ、と、伝えた。

長い話になった。

春信が説明し、姫さまは頷き、時たま質問する。

春信もまた、この時代について、いくつも尋ねた。

姫さまは一つ一つ、丁寧に答えてくれた。

途中、少年を無事に救出した報告がもたらされ、姫さまは涙ぐんだが、会いに行こうとはしなかった。少年のことは春信も気になる。中座を薦めると、困ったように微笑んで、しかし拒否。

「ここを出て雷太に会うと、他の者にも会わなければならなくなります。その前に、あなた様の話をもっと聞いておかなければなりません」

姫さまは表情を引き締め、話の続きを要求した。

「わたしの名前は、あなた様の時代では湖衣や由布と呼ばれているのですね」

「姫さまの本当の名前は何と言います？」

「さや、さやです。ただ、その名で呼ぶ者は滅多にいません。だいたいみなさん、姫さまとだけ呼びます。あなた様は……好きに呼んでください。……さやでも、……さやでも」

姫さまは頬を赤く染め、照れた笑みを浮かべた。

会話が進む。

あくまで、春信の居た世界での話と念を押して、今年諏訪家が滅びるだろう事を、話した。

それを伝えないのは卑怯なような気がした。出来ることならこの子のために、滅びを回避して欲しい、そう思った。

高遠家が裏切り、諏訪頼重が甲府で腹を切らされ、姫さまは信玄の側室となる。

姫さまは聞いている間、目を瞑っていた。

いずれは姫さまが武田家を継ぐ男子を産む。

と伝えた時だけ、驚いたように目を見開いた。

春信が全て語り終えた後、姫さまは諏訪や自らの運命には一言も触れずに、平成の話、特に学校について聞きたがった。

二時間近くも、話し込んだ。

火鉢の熱は、とうに冷めていた。

春信の胸元にあった小さな温もり、姫さまがうーんっと背伸びをした。

「不思議な、お話でした」

味わうように言って、姫さまは微睡む猫のように目を細めていた。

一拍二拍、間を置いてから、「ですが」と表情を改め、

「今の話、不用意にはいけません」

「今の、というと、どの話ですか？」

「わたしとあなたでした、全ての話です」

「……」

「武田晴信の名はまずいです。名には意味があります。武田は武田源氏の末である証、信の字は甲斐武田の通字で、晴の字は將軍家からの賜りです。武田晴信にはそれだけの意味があります。名を騙ることは重罪で、この諏訪でも名跡の名を軽々しく騙る者は罰せられます。心苦しいですが、その名は名乗らぬ方がよろしいかと存じます」

本当に心苦しそうに言う。

「はい。そうします。戦国にいる間は、別の名を名乗りますよ。それほど、好きな名前ではないですから」

煩わしく思うことも多い名前だったが、少し心が痛んだ。名前は確かに意味がある。名は、家族との繋がりだ。両親や恋、じいちゃんとの絆だ。時間を隔てて切り離された今だからこそ、竹田とい

う姓も、春信という名も、大切に思えた。が、戦国にいる間は、生きるために封じるしかない。

春信の同意を得て、姫さまは心底ホツとしたように息を吐いた。それから、

「あなた様が出会った蛇の神は、おそらくミシヤグジさまでしょう」

春信を呪った神について言及した。

「諏訪大社では様々な神仏を祀っていますが、その中でもミシヤグジさまは特に古い神さまです。神長官を歴任されている守矢一族に深い関わりのある神さまですので、ミシヤグジさまのことを詳しく知りたければ守矢一族に尋ねるのが一番ですが……」

少し言葉を濁してから、

「……ですが、崇める神に崇られて迷い込んできたと自称する人を温かく迎えるかという……」

「……まず、ないですよね」

協力どころか、妨害、下手したら排斥されかねない。

「未来に帰るため、ミシヤグジさまを捜すしとしても、その理由は伏せておいた方が良くはないかと思えます」

春信は同意して頷く。

「それに今はどこも戦だらけです。和しては背き、降伏してはまた背く。血の繋がる者ほど信用できない、そんな時代なのです。誰が裏切り、どこが台頭し、どこが滅びるのか。未来の話は誰もが知り

たい。知りたいけれど……」

と、姫さまは少し唾を飲み込んでから、

「神代から続いた諏訪家が滅びる。そんな不吉な予言、この諏訪では誰も信じたくありません」

苦しそうに、顔を左右に振った。

「あなた様が名指しした高遠家も、諏訪との間で複雑な歴史があります。多少反目し合いながらも、協力して敵と当たってまいりました。その高遠家が裏切り、諏訪が滅びる、などと口に出してしまえば、高遠の人々は本気で怒りますし、家中結束を乱す者として、諏訪家としても放置はできません」

春信は唇を噛みしめ、うなだれた。

それはそうだろう。裏切ってもない者を裏切り者扱いして、ただで済むはずがない。下手をすればその讒言が離反の口実とされかねない。春信の持つ中途半端な知識は、毒になっても薬にはなりそうになかった。

「だからあなた様は何も知らない。記憶もない。ということにしませんか？」

「……記憶喪失、を演じるのですか」

「はい。それが今は一番だと思います」

「信じますかね？」

「もちろん。誰も信じません」

姫さまは笑った。

「故郷を離れ過去と名を捨てる者は意外と多いのです。特に寺社にはその様なはぐれ者が集まります。諏訪大社にも大勢います。その人を見て、信用できると判断すれば、詮索しないで迎え入れるのが寺社の役割の一つです」

姫さまが春信の膝から、降りた。

春信に向き直り、正面から見つける。

「わたしは、あなたの話を信じます。あなた様は人ではあり得ぬ、不思議な現れ方をしました。そして、わらわを助けてくださった。慣れぬ事も多々あるとは思いますが、わたしが力になります。存分に頼ってください」

どんと姫さまは自らの胸元を叩いて、踏ん張れずに後ろに倒れた。

「ありがとうございます」

春信は微笑み、感謝の気持ちを込め、耳まで赤くし寝転がっている少女に頭を下げる。

ここは戦国時代で、春信は異物だった。

衣食住全ての困窮するところだったし、疑わしい、邪魔だという理由だけで、殺されることもあり得たはずだ。というか、そうなりかけた。いきなり、斬りかかられた！ 思い出して、少し身震いする。

「では、まいりましょうか」

まるでこれから合戦に赴くような勇ましい顔で、さや姫が春信を

促した。

春信も表情を引き締め、頷き、立ち上がる。

部屋を出ようとして、姫さまが付いてこないことに気づき、春信は振り返った。

「お、起こして……………いただけませんか？しょうか？」

寝転がったまま姫さまが、手をわたわたしていた。

006、顕現ノ章 一日の終わり

姫さまを背負い、屋敷の玄関口に移動すると、掛け布団にくるまり上社どのが寝転がっていた。

のっそりと起き上がり、

「もういいの？ ……と聞いてあげるには長かったね」
頭をぼりぼり掻きながら、大あくびする。

「助かりました、上社どの」

姫さまが春信の肩口から顔を突き出し、ひよこつと頭を下げる。
上社どのは頷きながら、

「神殿からの使者はお待ちいただいている。そのの、」
姫さまから春信に視線を移し、

「君とも、是非とも会いたいそうだ」

春信は奥歯を噛みしめ、小さな頷きを返した。
神殿、つまりは諏訪頼重との面会だ。

姫さまを背負ったまま、武装した侍たちに前後を挟まれ、町の外に移動。

長い石階段を降りた先に、大きな湖が広がっていた。

町からも見えていて、諏訪湖だな、と頭の隅で考えつつも、さほど気にかけていなかった。諏訪なら、そこに諏訪湖があるのは当たり前だからだ。

しかし棧橋に用意された小舟に乗り移りながら、「あれ？」と首を捻った。

確か、恋と一緒に諏訪巡りをしていたとき、上社からは上原城跡まで、まっすぐ歩いて移動できていたはずだ。本宮も前宮も、諏訪湖からは大きく離れていた記憶がある。

何故、本宮を出て50メートルほどの場所に、湖がある？

なぜ、船に乗って移動する？

一瞬疑問に感じたが、その答えは確か高島城の案内にあった。

何のことはない。

江戸時代の初期に、水害の抑制と農地拡大のために干拓工事をやったからだ。

それによって諏訪湖の広さは三分の一ほどに縮小している。

つまり戦国時代の諏訪湖は、現代人が知っている諏訪湖の三倍広がったことになる。

岸に着き、舟を下りる。

道の向こうに、町が開けて見える。

堀や堀に囲まれた本格的な城塞都市だった。堀の外にも、小屋が点在して見える。

「あそこが上原城の城下町、上原町です」

城下町の簡単な説明から、諏訪の歴史まで、姫さまが教えてくれる。

諏訪家が上原城を築城し、本拠を移したのは、70年ほど前。それまでは上社の前宮で暮らしていたらしい。城下町はこの70年で発展したことになる。

その城下町をまっすぐに通り抜ける。

木立の間、山を上る。山の上に、上原城がある。

70年の間、この上原城も増改築を繰り返し、発展し続けているそうだ。

姫さまが、上原城を指さし、それから少し指を下げ、

「あの上原城と町のほぼ中間に、父上の屋敷があります」

春信は頷く。

信玄征服後には板垣平と呼ばれる曲輪で、今はまだそこに諏訪頼重の屋敷があるはずだった。

先に姫さまだけが呼ばれ、春信は詰めの間で待たされた。

姫さまは戻ってこず、軽装の武士が三人、春信を呼びに来て、彼らに前後を挟まれ廊下を歩む。

通された部屋は、畳敷きのごく普通の八畳間。

膝行して部屋に入る。

頭を下げたまま、目の端でざっと部屋の中を観察する。

部屋の奥、上座らしき場所であぐらを掻いている男が、きつと諏訪頼重だろう。彼の右には二人、左に一人、重鎮らしき人物が、座している。

膝行したまま進み、頼重からは縦に畳三枚分ほどのスペースを開けて、平伏する。

この作法は、姫さまから教えて頂いた。

しばらく、値踏みされた後、

「顔を上げていいよ。というよりも、よく顔を見せて欲しいかな」

諏訪頼重の第一声が掛かった。

女と間違っような、高くか弱い声音だった。

春信は正座したまま、顔を上げ、諏訪頼重を見つめる。

整った顔立ちに、目だけが大きく、愛嬌がある。

一国の主としては、随分と若い。

それもそのはず、確か史実ではこの時期、まだ20の半ばだったはずだ。

諏訪頼重は、口元で笑っていた。
暖かみのある色男だが、身体の線が細く、武家の頭領としては、いささか頼りない風体だった。

「娘から聞いたよ。助けてくれたそうだね」

「はい」

「感謝する。ところで、君は、記憶がないそうだね？」

「はい」

「かわいそうに」

と、諏訪頼重は同情するようにため息を吐き、

「名前は？ それも覚えていないのか？」

「……はい」

少し遅れて、春信が返事する。

「そうか」

と、頼重は笑い、

「君は、自分が何者なのかも、どこから来たのかも覚えていないそうだけど、諏訪のだいたいの状況くらいは、理解しているかな？」

「大まかには、姫さまに教えていただきました」

「うん。諏訪は今、少々厄介な状況にある。一年前も、二年前も、十年前も、おそらく僕が生まれる前も、諏訪は厄介な状況にあったけど、今は特に厄介な状況にある」

口元は微笑んだまま諏訪頼重の目が、鋭くなる。

「とても、大切な娘でね」

「……」

「彼女は僕よりも、諏訪家の命運を背負っている」

「……」

「悪い虫に付かれては困るんだ」

「……」

「まあ、しかし、君が娘を助けてくれたのは、事実のようだし」

と、頼重は身を乗り出し、芝居臭い満面の笑顔を浮かべ、

「だから僕としても君に感謝し、君を信じようと思う。どうだ、この僕に仕えないか？ 悪いようにはしない。君の武勇と手柄に見合うだけの待遇で雇い入れる。どうだ？」

頼る者の居ない段階なら、きっと春信も喜んで了承しただろう。

しかし春信はすでに姫さまと出会っている。その姫さまからは誘われても絶対に受けるなど、堅く言い含められていた。

受けてしまえば侍として御恩と奉公の関係が生まれ、命令を拒めなくなるし、自由な時間もなくなるし、私と会うことも出来なくなり、故郷に帰るなど思いもよらず、うんぬん。

「ありがたい話ですが、お受けできません」

「ほう。何故？」

頼重が目を細めた。許せない行為を咎めるような怖い目だ。

さて、どう答えたものか。

春信は、諏訪頼重の目を、じっと見つめ返した。

そして悩んだ末、結局、正直に答えた。

「待っている人が、いるからです。俺には、どうしても帰らなければならぬ場所が、あります」

二人の視線が、長く絡み続けた。

根負けしたように、諏訪頼重が、ため息を吐いて目をそらした。

「……………記憶もないのに、おかしなことを言う」

「すみません」

春信は深々と頭を下げた。

「まあ、仕方ないな。君を拾ったのはあの子だしね。落ち度もないのなら、取り上げるわけにもいかないか。しばらく娘に預けておくとしよう」

言うてから、諏訪頼重が作り物めいた笑顔を浮かべる。

「ところで、名前がないのも不便だね。僕が名付けてあげようか」
「？」

「ありがとうございます」

さすがに名無しのままではまずい。

それに君主から名前を与えられるのは戦国時代では名誉なことのはずだ。自分で勝手に名乗るよりも、この時代で行動する上できつと助けになる。

「そうだね。娘は君のことを、建御名方の顕現したお姿だ、とか言っていたから」

うーんつと諏訪頼重があごに手を当て、唸っている。

「よしっ！」

ぼんつと手を叩いた。

「どこの馬の骨とも分からないから、馬野骨太郎！ うん、良い名だ！」

……あれ？ 建御名方のくだりは、一体どこに？
疑問に思ったが、

「あ、ありがとうございます」

とりあえず、礼を言っておいた。

仕官を断ったことに対する嫌がらせだろうか？

少しへこみつつも、どうせ元の時代に戻るまでの、仮の名前ではない。

と心の中で強がってみた。

春信が退席してから、諏訪頼重は重鎮たちと円座を組んだ。

諏訪惣領家の方針は、だいたい此処にいる四人の合議で決められていた。

「どう思う？ 伊豆入道？」

祖父の代から諏訪惣領家の相談役を務める老人、千野伊豆入道に尋ねる。

「刺客や密偵のたぐいとは思えなんだが。……しかし、随分と落ちて着いておりましたな」

細い目を鋭く光らせ、禿頭の僧衣、伊豆入道は、答えた。それか

ら、

「越後どのはどう思われましたかな？」

と、諏訪頼重の叔父で、福の神のように穏やかな顔をした、諏訪越後の守 満隣に話を振った。

「とても良い子そうで、ホッとしましたぞ」

越後の守 は、丸顔をにこにここと微笑ませた。

諏訪頼重は、頷き、

「薩摩どのはどう思われましたかな？」

この場に残る最後の一人、ひげ面で強面の顔をした、諏訪 薩摩の守 満隆に確認する。この男も諏訪頼重の叔父で、諏訪 越後の守 満隣の弟にあたる。

「日に、焼けておった」

ぼそりと、ひげ面が呟く。つぶやきの声も、重く渋い。

「ふむ。確かに」

と、諏訪頼重は頷いた。

季節は、春になったばかりだ。

真夏から来た竹田春信こと馬野骨太郎の褐色に焼けた肌は、普通ではあり得ない。

「やはり南蛮帰り、でしょうかなあ？」

と、諏訪 越後の守 満隣が首をひねる。

骨太郎と娘が、一刻近くも話し込んで居る間に、靴やジーパンなど春信の服装が話題になっていた。目撃者はそれを南蛮の衣服と報告していた。

「彼の身元に関しては、神長官にお任せするしかないでしょうな」

余談は禁物、とでも言いたげに厳しい口調で、老人、千野伊豆入道が言う。

全国に末社のある諏訪大社の神官は、全国を渡り歩いている。これだけ目立つ若者の噂なら、どこかで掴めるはずだった。

諏訪頼重はため息を吐いた。

「しかしあの子が、わがママを言うとはね」

春信は関所を通過した証である、通行手形を所持していなかった。いわば関所破りであり、重罪なのだ。

さすがに娘を救ったという人間を、断罪は出来ないが、そのまま娘の側に置くわけにもいかない。

この四人で話し合い、諏訪で雇い入れ、武辺を好む 薩摩の守が預かる事でまとまったのは、かなりの譲歩なのだ。

しかし娘は断固としてそれを拒絶した。

あの者は建御名方の化身であり、天から参られた。それは間違いないが、しかしあの者には記憶がない。身の振り方を決めるにしても、彼自身の判断で、もう少しこの国に慣れ親しんでからにするべきだ。それまではわらわが面倒を見ると。

なるほど天から参られた神の化身なら、関所を通過していないのも致し方ないが、素直に納得できるものではない。

口論の末、神である大祝が招いた客人に、諏訪の惣領は手を出すつもりか、とまで言い出せば、よくよくのことだ。

「君も、わがままを言うような年頃になったんだね」

との嫌みに、につこり微笑み、

「はい。なりました」

と、返されれば、もう何も言いようがない。

幼い頃には幾度となく、予知夢を見た彼女だ。それが元で、祖父から下社の大祝に祭り上げられ、 姫の宮 に隔離された。以降は、諏訪を騒がせる夢を見ることは表面上、なくなった。いや、話さなくなつた。

が、今朝、上社本宮に赴いたのは、夢が理由だという。

この半年、幾度か同じ夢を見て、上社本宮に足を運んでいたという。

いったい、どんな夢を見たというのか。

そして彼は何者でどこから来たのだろうか。

帰らなければならぬ場所があるのは、おそらく本当だろう。娘を救われた借りがあるのだから、諏訪頼重としても、機会があれば協力してやるうと思う。しかしその帰らなければならぬ故郷が、娘が言うようによもや天上などということはあるまい。

伊豆入道がぼつりと呟いた。

「なかなかの美丈夫でしたな。姫は、面食いですかな」

「……………」
「……………」
「……………」

他の三人は押し黙った。

隣国の甲斐で、同盟者だった武田信虎が追い落とされ、武田晴信が甲斐の実権を握ってから、諏訪は完全に孤立してしまっていた。

東から武田が、南から高遠が、北西からは小笠原が虎視眈々と諏訪の地を狙っている。

しかしまだ、この状況を切り抜ける最良の一手が、残されていた。それはどこか有力な武將に、諏訪頼重の長女、さや姫を嫁がせ、強固な同盟関係を築くことだった。どこに嫁がせるかは今川、上杉、北条を巻き込み、活発な外交交渉が繰り広げられている。

彼が何者で、どこから来たかにかかわらず、今この時、姫を横から奪われては実に困ったことになるのである。

輿入れの件はさや姫も承知しており、諏訪のためなら、どこにで

も嫁いでゆくと、明言もしていた。

まさかありえぬ、とも思うが。

「もう少し、釘を刺して置くべきだったかな？」

諏訪頼重の独白に、年長者の三人は、悩ましそうに首を傾げた。

長い一日が続く。

あまりに長い一日である。

春信がミシヤグジに喰われたのは、午後の五時を過ぎた刻限だった。朝早くから妹に引つ張り回され、くたくたに疲れていた。

しかし戦国に現れた時間は、日が昇り始めた早朝だったようだ。実際に十時間くらい一日が長くなったことになる。

諏訪頼重との対面が終わった後、姫さまと合流し、姫さまを背負って船着き場に戻り、そこから小舟に乗って、北上。最北の船着き場から、二〇〇メートルほど、下社秋宮から150メートルほど北西まで、また姫さまを背負って歩き、やっと姫さまの住まい、姫の宮 に到着した。

広さは小学校の敷地くらいだろうか。

幅2メートルほどの堀がぐるりと囲み、水が流れている。

竹で作られた垣根は、高さ2メートル程度。門は、朱に塗られた鳥居となっていた。全体的に、神域を思わせる造りだった。

輪郭式の三重構造になっていて、もつとも外の郭は男郭と呼ばれ、馬小屋と惣領家から派遣された衛兵の詰め所、雷太を含めた 姫の宮 に仕える男衆の住居、男用の温泉がある。

二つ目の郭は、緩衝地帯で、細い道と一面の畑ばかりだ。
最後の郭、ドーナツの穴に相当する郭が、姫さまと姫さまに仕える七人の巫女の住居、男子禁制、つまりは真の 姫の宮 である。
もつともそれを春信が知るのは、後日のことになる。
何も知らぬまま、姫さまに招かれるまま、春信は堂々と足を踏み入れた最初の男となった。

男郭で雷太にも再開し、姫の宮の住人たちを紹介され、屋敷を案内される。

諏訪頼重からの使者も来て、生活に必要な物品や太刀などが姫さまを助けた褒美の名目でもたらされた。

早い夕食をいただいた後、姫さまと二人きりで部屋に籠もり、会話を話す。

諏訪頼重との対談の内容を伝え、名前を頂戴したことも、告げる。

「ぶふうっ！」

大ウケだった。

「あっははははははははははははははははっ！」

畳をばんばん叩いて、姫さまが笑い転げた。

これだけ笑って貰えるのなら、この名でもまあいいかと思えてくるくらいの大ウケだった。

「ああ。父上らしいです」

必死で笑いを押さえ込み、

「う、馬野骨太郎ですか。う、うん。良い名前ですね！」

「……どこがですか？ さんざん笑ってたじゃないですか」
じとつと見ると、慌てたように、

「う、馬は、人よりも力が強く、速く走りまうです。そ、その上、

勇敢でかしこい動物ですよ。馬が野を駆ける様は本当に美しいのです。そして……骨太郎。ぶふう……う、うん！ 骨がありそうではないですか！」

なんて、ポジティブな子なんだろう。彼女の目に涙がたまっていて、所々かんだり吹き出したりして、必死に閉じた口元がふにふに動いてなければ、感動してしまいそうなくらいに。

そんなこんなで、温泉に浸かり、一日の疲れを落とす。

か細い蝋燭の火を吹き消し、布団に入る。

本当に、長い一日が終わる。

今夜はさすがに、よく眠れるだろう。

ふと、気配を感じた。

窓の外だ。

雨戸が嵌って確認できないはずの窓の向こう側を、数人の人影が横切っていった。それが、はっきりと知覚できていた。

横たわっていたベッドから、身を起こす。

その直後だった。

部屋のドアが荒々しく開け放たれ、三人の鎧武者が乱入してきたのは。

黒い鉄の面頬をしている。それが蛍光灯の明かりに禍々しく映え、鬼の形相に見える。振り落とされる日本刀が、春信の腕をかすめる。恐怖に心が鷲掴みにされる。

揉み合いになり、気が付いたときには春信の手に、日本刀がつかみ取られていた。

身体に影が差し、上を見上げた。

鎧武者が大上段に日本刀を振りかぶっている。

春信はしゃがんでいた姿勢から立ち上がった。

鎧武者の凶刃を回避し、逆襲に転じた。

殺さなければ殺される。迷いもなく。躊躇もない。

春信の振り下ろした日本刀は、鎧武者の肩口に食い込んだ。

肉を裂き、骨を断ち、血がしぶいて、鎧武者が崩れ、部屋は鮮血に染まった。

道場の裏手で、春信は立ちすくんでいた。

人を殺してしまった。深い後悔が、胸の奥にわき上がる。恋の、じいちゃんの顔が浮かぶ。二人の哀しむ様子が、想像できた。逃げようか、自首しようか。いや、正当防衛が成り立つはずだ。成り立つだろうか？ ぐるぐると浅ましい考えで自らが押しつぶされそうになった時、春信は眠りから目覚めた。

跳ね起きても、しばらくは夢を夢として認識できなかった。人を殺してしまった。

その思いが強く心を締め付けていた。

手には人を斬った感触がまざまざと残っていた。

今の夢は、本当に夢なのか。

春信は凶行を否定するため、夢である証拠を記憶の中から必死でかき集めた。

襲われた現場は春信の部屋だったが、よく思い出してみると明らかに不自然な箇所もあった。春信の部屋は東側にある。しかし雨戸は西側を向いていた。あの雨戸の形状は、両親の寝室の窓だった。道場の裏手の景色には、学校の道場の裏手の景色が混じっていた。

間違いない、夢だ。

ぐっしょりと汗にまみれていた春信が、ほうっと息をついて、身体を起こそうとした。

その瞬間に、フラッシュバックが襲ってきた。

鎧武者を斬った記憶だ。

夢ではなく、上社前宮で現実に斬った記憶だった。

夢によって誘発されたのか、押し込めた記憶が夢を見させたのか。気持ちが弛緩した瞬間、堰を切ったようにあふれ出してきた。

心のどこかで、今日一日の出来事を、現実として受け入れていなかった。幻かもしれないと、疑っていた。ミシャグジも、鎧武者も、戦国時代にいることも。

しかし夢から覚めたことにより、夢から覚めても覚めなかったことにより、春信の心は逃れられぬ現実として、認識してしまったのだ。

死んでいるかもしれない。春信に斬られた彼らは。生きていたとしても、一生の傷を負った。

考えないよう封じていた思考が、春信を捕らえきって放さなくなった。

手の平の人を斬った感触が、焼け付くように強大になる。

めまいがした。

身体がふらついた。

吐き気がする。

心臓が経験のない速度で暴れ始めた。

空気が欲しい。それ以上に明かりが欲しい。

部屋は闇に包まれていた。

天井付近、障子の上にある欄干に、僅かに薄明かりが差しているだけで、部屋の下方は完全な闇。自らの身体はうつすらとも見えな。闇の中で、記憶の映像のみが、瞬きのように消えては浮かんでを繰り返している。

春信は布団から這い出て、畳に手を這わせながら、這い進む。指の先に、障害物が触れた。障子だ。破かないよう木杵を抑えて、引き開ける。

廊下も、闇だった。

不埒な侵入者を防ぐよう、頑丈な鎧戸が屋内を下界から隔絶し、光りをも封殺していた。

春信はその鎧戸に触れ、絶望感にさいなまれた。

上部にある欄干から僅かに月明かりが差しているが、空間の下半分には到達せず、深い闇。

涙があふれ出た。

発作的に叫びそうになり、慌てて自分のど元を抑える。

闇の中に踞り、嗚咽をかみ殺して震える。

暗闇の中、血の流く鎧武者の映像が繰り返される。斬り飛ばされた指が、地に落ちた指が、消えることなく春信を責め続ける。

ふっと、薄い明かりが差した。

二つ離れた部屋の障子がゆっくりと引き開けられ、手に燭台を持った姫さまが足を引きずるようにして廊下に出てきた。

蠟燭の火が、少女の整った顔をゆらゆらと照らし出す。

姫さまが、微笑んだ。

無言で、ひよこひよここと歩み寄って来る。

姫さまが、燭台を廊下に置く。

春信の頭を抱え込むようにして、そつと背中を撫でた。

少女のお腹に顔を埋め、春信は堪えきれず、泣いていた。

鎧戸を開け、縁側に並んで座り、月を見上げながら、一時間ほど
姫さまと話をした。
他愛のない、未来の話ばかりを。

登場人物リスト

簡単な人物説明。

竹田春信たけだはるのぶ

高校三年、十七歳。剣道高校生チャンピオン。
戦国時代の諏訪にタイムスリップしてしまった。

さや姫

諏訪頼重すわよりしげの娘。諏訪のお姫様。十一歳。
オリジナル設定で下社大祝しもじやおおほつりを務めている。

守矢絆もりやきずな

十八歳くらい。一の巫女。さや姫の側近。

諏訪惣領家そうりょうけの偉い人

『四人組』。

諏訪頼重すわよりしげ

諏訪惣領家の主。諏訪の大名。諏訪で一番偉い人。26

歳くらい。

さや姫のお父さん。敬称は『神殿しんどの』。

昔、諏訪の主は諏訪大社上社前宮しんどのにある神殿で暮らして

いた。その時から

の呼び名。いわゆる『お館様』の諏訪ローカル版。

千野伊豆入道ちのいぢゆいぢゆう

頭を丸めて、僧衣を着ている。頼重の祖父の代から軍師のような役割を務めている。

四人組でもっとも年長者。60歳は超えている。
本編では『伊豆入道』の表記が多い。

諏訪薩摩の守すゐまのさむらい

諏訪頼重の叔父で、剛の者。合戦大好き。

実名は諏訪満隆みつたか。

本編では『薩摩の守』や『薩摩』表記が多い。
30代後半。

諏訪越後の守すゐちのさむらい

諏訪頼重の叔父。諏訪家の良心、諏訪の和魂。実名は諏

訪満隣みつちか

『薩摩の守』のお兄ちゃん。

本編ではさほど登場しない。『越後の守』や『越後』表

記が多い。

40歳くらい。

『伊豆』、『薩摩』、『越後』、この三人の『地名』持ちが、諏訪の偉いおじさん。

諏訪惣領家すゐりょうけ

いわゆる、本家。宗家。家系図的に本流。

歴史の古い諏訪家はあちこちに分家が居る上、千野も含めて諏訪に住む豪族はほとんど諏訪一族からの別れ。宗教上の信仰対象でもあるため、区別して考えられている。

諏訪大社の人々

上社大祝かみしゃおほほうり

諏訪頼重の弟。

さや姫の叔父。さや姫より2、3歳年上。

諏訪大社でもっとも偉い人。

ただし象徴的な立場で、祭祀における権限や、独自の領地、
兵士を持たない。

神長官じんちやうかん
守矢頼真もりやよりまね

実質的に、諏訪大社を取り仕切っている人物。守矢一族の

頭領。

禰宜ねぎ
矢島満清やしまみつぎよ

諏訪大社の偉い人。禰宜大夫ねぎだゆう。

004話で、春信を拘束させようとした。

神長官とは仲が悪い。

神長官、禰宜大夫、権祝、擬祝、副祝が、諏訪大社で偉い神官。
ただし権祝、擬祝、副祝は本編使わない。

姫の宮ひめのみや
の人々

雷太らいた

姫の宮 で働く男の一人。

姫の宮 で働く男性は、女性よりも少なく、3〜5人。

姫さまと同じくらいの年齢。

二の巫女 〱 七の巫女

姫の宮 に仕える姫巫女^{ひめみこ}たち。

皆、巫女装束の胸元に、それぞれの番号を刺繍している。

007、絆ノ章 二日目〜五日目

太陽は東の空に昇っている。
気持ちの良い風が吹き抜けていく。

諏訪湖を見下ろす道の途中、春信は足を止めた。
木立の切れ目から、美しい風景が見渡せた。
八ヶ岳や鉢伏山などは、元いた時代と変わらず壮大に屹立しているが、しかし人里の景観は随分と違っている。

諏訪湖が大きく広がっている分、平地が極端に少ない。
寺社も町も、湖岸近く、山の傾斜に張り付くように点在しているだけだ。

もちろん、電柱やアスファルトなどあるはずもないし、自動車も走ってはいないし、道も土がむき出しの山道ばかりだ。
その山道を、馬に乗った武士や、荷を背負った農夫が往来している。

諏訪湖には、小さな手こぎの舟がゆらゆらと揺れている。

ここには、日本の原風景が、手つかずで残っていた。
見慣れない風景なのに、何故か、故郷に帰ってきたような感慨が、
去来する。

同時に慣れ親しんだ未来が強く恋しくもなる。
相反する光景が奇妙に合わさり、心を揺さぶってくる。

「どうか、なさいましたか？」
優しい女性の声が、春信のすぐ真横で尋ねた。
慌てて春信は彼女に視線を移した。

女性の名は、守矢絆。

歳は、春信よりやや上くらい。

身長は、160センチ程度。

髪は、胸元辺りまでの長さ。うなじの後ろで一括りに赤い紐でまとめられている。

顔は、少しきつめの美人で、春信の好みだった。

ほっそりとしているけれども、出るところは出ている。

その出ているところ、胸元、左側には、朱の刺繍で、一と印されている。

一の巫女 の証である。

彼女を含めて七人の女性が姫さまと共に 姫の宮 で生活していて、一の巫女 から 七の巫女 を名乗っている。

一の巫女 は、首を傾げて、春信を下から覗き見るように伺っていた。

「いえ、何でもありません。ただ、綺麗だなと思って」

一の巫女 は、春信から視線を外し、春信が見惚れていた景色を眺めた。

「そうですね。私も好きです」

しばし並んで雄大な景観に見惚れた後、

「そろそろ、参りましょうか？」

すっと、一の巫女 が身を寄せるように、春信に腕を絡ませてくる。

春信の右腕が、柔らかい膨らみを知覚する。

「そ、そうですね」

道ですれ違う武士風の男が、二人の姿を見て、何か言いたげに立ち尽くしている。

春信は努めて気にしないように前を向いて歩く。

これから二人が向かうのは、上社前宮。

四つある諏訪大社のもっとも古い原点とも言うべき聖地で、春信がミシヤグジに喰われた場所だ。同時に、春信がこの時代に現れ、鎧武者と戦った場所でもある。

上社前宮の社は、静寂に包まれていた。

諏訪大社発祥の地ではあるが、神社としての機能は上社本宮に、拠点としての役割は、上原城に移っている。

古い祭祀の幾つかはいまだ前宮で執り行われるが、戦国時代の前宮は半分遺跡と化していた。

さほど広くない上社前宮を、一の巫女に案内されて巡りながら、頭の中でミシヤグジに呼びかけるも、反応は返ってこない。

神原廊と呼ばれる、儀式のための長い建物、昨日、襲われたばかりの場所に立ち、春信は目を瞑った。

(ミシヤグジさま)

頭の中で、呼びかける。

(ミシヤグジさま)

繰り返し、何度も呼びかける。

(あやまります。反省しました。元の時代に帰らせてください)
しばらく待ってみたが、現れない。

目を開け、あたりを見渡す。

白い透き通った蛇神の姿は、どこにもなかった。

春信は 一の巫女 に顔を向け、首を左右に振って見せた。

「帰りましょうか？」

春信の言葉に、 一の巫女 は首を傾げた。

「もう、ですか？ もう少し見て回った方がよろしいのでは？」

ぐるりと広大な上社前宮を見渡しながら言う。

春信は言葉に詰まる。どうしようかと、逡巡する。

なんせ、昨日あのような事件があったのだ。怖い夢も見た。
勇気を振り絞って来るには来たが、兇行のあった場所ですっきりとしていて恐怖がぶり返して来たのだ。必死に押さえているが、膝がぐくぐくと笑いそうだ。今の春信にはもう一度武者の集団と戦って勝つ自信がなかった。

一の巫女 は無表情で黙している。
何とも言えない静寂が辺りに満ちる。

「そうですね。ここは人通りも少ないですし……。それでは、上社さまのところへ、昨日のお礼もかねてご挨拶に参りませんか？」

救われたように春信は頷いた。

「その後は本宮でミシヤグジさまを捜し、守屋山に登りましょう。ミシヤグジさまにまつわる聖域に心当たりが幾つかありますからそれを廻って、城下町を見学してから、神殿さまの屋敷の周辺を散策して、最後は下社秋宮と春宮にお参りすれば、ちょうど日も暮れるでしょう」

「……」

帰りたいたいという主張は、ごくあっさりと却下されていた。

「それで、宜しいですね？」

「……はい」

微笑んだままぎゅっと強く腕を締められ、春信も微笑んで、同意した。

昨日、散々恋と歩いた諏訪の地を、今日は 一の巫女 に引っ張られて、歩き続けることになった。

蠟燭のか細い明かりが、室内を照らしている。

「そうですね。今日もミシヤグジさまとはお会いになれませんでしたが」

帰還した春信の報告を受け、姫さまは複雑な息を吐いた。

春信の戦国時代生活も、五日目となっていた。

日の明るい内は 一の巫女 と共に諏訪の名所を巡り、帰宅後はこうして姫さまと作戦会議を開くのが、半ば日課となりつつある。

「まあ、そう簡単に出会えるとは思っていませんでしたから。しばらく、ご面倒をおかけします」

春信は、姫さまに頭を下げる。

「あ、はい。もちろんです。故郷に帰る手段が見つかるまでは、あなた様の家のようにご存分にくつろいでください」

姫さまは取り繕ったように、笑った。

別に春信が滞在することに不満はない。それ自体は凄くうれしいが、春信の頬がだらしなく緩んでいることが、なんか嫌なのだ。あの夜はあんなに不安そうにしていたのに。してたのに。

姫さまは小さく頬を膨らませた。

春信はミシャグジに喰われてこの時代にやってきた。

未来に帰るための手がかりも、今のところミシャグジしかない。

言葉も通じ、人の心を読む神さまだった。

何より諏訪が崇める神さまだ。

神社の行う祭祀とは、怒れる神を鎮めるためのものだ。諏訪大社では、ミシャグジ神を対象に、千年を越えて祭祀を執り行ってきた。まさにプロ中のプロである。

ミシャグジの好む供物には、いくつも心当たりがある。

だからまずはミシャグジを探しだし、交渉しよう、と言うことになった。

ただし、姫さまは先日の事件と怪我のせい、しばらく外出自粛である。

いくら諏訪頼重が黙認したとはいえ、知識のないよそ者の春信が、

戦国時代の諏訪で、自在に探索できるはずもなく。

そこで協力をお願いしたのが、姫さまの一の側近、一の巫女である。

神長官、守矢頼真の娘で、ミシヤグジに関しては、姫さまよりも詳しい。

そんな一の巫女は、部屋の隅で横になってくうくう寝息を立てていた。

立场上、姫さまと春信二人きりの密談に難色を示して毎日同席しているのだが……。

結構な確率で寝ていた。

二人は一の巫女を起こさないよう、小さな声でこそこそと会話する。

話し合わなければならぬことは、たくさんある。

ミシヤグジを探す方法。ミシヤグジを怒らせない交渉手順。ミシヤグジに頼らず未来に帰る方法。この時代の知識。さらには春信の設定。

「わたし、今日一日考えました。確かに絆の言うとおりです。この誰とも分からない記憶喪失の殿方を、助けて頂いたからといって姫の宮に招いたのは、浅はかでした」

春信を客として遇することは、諏訪頼重の黙認を得てはいるが、男子禁制の姫の宮に連れ込んだのは、行き過ぎである。

春信を匿うだけなら、姫の宮の男郭や叔父である上社大祝さまのお屋敷など、他にいくらかでも適切な場所があるのだ。

さや姫と春信の間に変な噂が立ってしまえば、諏訪総領家はそれを口実に二人を引き離そうとするだろうし、場合によっては春信を

追放しようとするかもしれない。これでは春信を守るつもりで、逆に苦しめることになる。

「だからといって、絆の恋人という設定は、その、いかがわしいというか、いささか問題があると思うのです」

もじもじと姫さまは不満を表明する。

一の巫女 から春信の身柄を即時諏訪大社に預けるよう迫られ拒絶し、何とか姫さまが引き出した譲歩案である。

姫さまと春信の噂が立つ前に、一の巫女 と春信の噂を立ててしまう苦肉の策だ。

一の巫女 としては自己犠牲で姫さまが春信と一緒に居られるよう対処したのだが、姫さまとしては、なんかもう春信がさつきから寝ている 一の巫女 をちらちら気にしてるのとか含めて、もによもによとした不満があった。

「ですから、こうしましょう。絆との恋人設定は止めにして、わたしとあなた様は生き別れた兄妹だったのです！」

「……………な、なんだってー」

とりあえず春信は合いの手を入れたが、平坦な声になった。

「兄妹ならわたしがあなた様を匿っても少々甘えても不思議ではありません」

「えっと、つまり俺も神殿さまのご子息って事ですか？ それだと諏訪家を継ぐ資格が出てしまいますが？」

「すごい！ お兄ちゃん！」

「いや、絶対そんなこと言い出したら諏訪から追い出されますよね？ 良くても？」

下手したら殺される。

「今のは冗談です。わたしもそう思って没にしました」

えへへっと姫さまが笑う。はははっと春信も笑う。

「もう一つ、考えてあります。実は、あなた様は女だったのです！」

「……………な、なんだってー」

「女でしたら 姫の宮 に匿っても変な噂は立ちませんし、わたしが少々甘えても不自然ではありません」

「いや、でも俺。上半身裸、大勢に見られてますけど？」

「……………む、胸のない女性もいます。わたしだってそんなに……………」

「……………」

「……………駄目ですよね、やっぱり」

えへへっと姫さまが笑う。はははっと春信も笑う。

戦国時代五日月は、ほのぼのと過ぎていくのであった。

008、絆ノ章 お湯の中

春信戦国生活も十日目に突入していた。
未だミシヤグジは現れない。

今のところ、姫さまの恋に気づいているのは、寝食を共にしている
姫の宮の七人の巫女と、協力者たる上社大祝。

危惧しているのは惣領家を取り仕切る、諏訪頼重、薩摩の守、越
後の守、伊豆入道の四人だけである。

一の巫女の策が成功したからに他ならない。

おかげさまで、『一の巫女は姫さまの許しを得て愛人を隠していた。凄腕の剣豪で、姫さまを狙った七人の不埒者を斬つたらしい。そのせいで男の存在が知れてしまったが、一の巫女は開き直つて諏訪中を連れ歩いている。父親の守矢頼真は寝耳に水で、相当慌てている。』

という状況になっていた。

戦国時代だけに娘の結婚は一族の長や父親が決める。

武家のように政略に使われることはまれだったが、守矢一族もやはり例外ではない。

かくして一の巫女は昨夜、父に呼びつけられて、一族の皆から代わる代わる小言を言われたり、いろいろな詮索を受ける羽目になった。

どうやら諏訪大社の人脈を持つてしても春信の足跡をたどること

が出来ないらしく、一の巫女 から情報を聞き出そうと、取り調べは執拗にして朝まで続いた。

一の巫女 は一日八時間は寝ないと調子のでない質だった。朝までの尋問はそれを知った上での嫌がらせだ。

延々朝まではぐらかし、一の巫女 は 姫の宮 へと帰還した。

春信と並んで山道をとぼとぼ歩きながら、

……失敗したかなあ、と 一の巫女 は悔やんでいた。

姫さまがぼろぼろ泣くから、仕方なしに自分を犠牲にしてまで一緒に居られるよう差配したし、姫さまが一生のお願いですと頼むから、ミシヤグジ探しに協力してるのだ。

なのに、焼き餅焼かれていじけられては、なんかもう、可愛いやら腹立つやら。

睡眠不足も相まって 一の巫女 は少々やさぐれ気味だった。

……これ、いつまで続けたらいいのかな？

眠い目をこすり、あくびをかみ殺しながら、一の巫女 は胸中でばやいた。

実を言うと、一の巫女 は春信の事情を詳しく知らなかった。

天界から姫さまの危急を見かねてやってきたとか、天界に帰るためにミシヤグジを探してるとか、そんな設定は聞いているが、未来から来たとは、聞いていなかった。

さようですかと、軽く流している。

光と共に唐突に現れ、とてつもない技で姫さまを救ったとは、堅

物少年・雷太の証言でもある。

時代が時代だし、神長官の娘でもあるし、姫さま絡みだし、そういうこともあるものかなと、半ば納得している。

ミシャグジ探しも神さまと会えるかも！とちよっとわくわく参加していた。

しかしそれはそれとして、一の巫女は、姫の宮の実質的な責任者だった。

特に筆頭巫女だった諏訪桜すわさくらが結婚して 姫の宮 を離れてからは、外向的な役割を一手に引き受けている。

仕事はみんなに分配して任せているが、どうしても一の巫女でなければ進まない話もある。

姫の宮 の護衛と監視は、惣領家の役割で、襲撃で死んだ五人の侍も惣領家の人間で、葬儀も手当も惣領家の責任になるが、全く知らぬ顔も出来ない。 姫の宮 としてはかなり負担となる弔問の品を、姫さまの名で届けさせている。

さらに雷太は当分働けないし、看病に人手もいる。

物資の運搬や薪割りなど力仕事は男衆の役割だが、明らかに廻らなくなっていた。

姫さまと交わした大切な約束ではあるが、こんなことしてる余裕はないのだ、本当は。

こう何日も無駄に時間を潰していたら 姫の宮 が潰れてしまう。早急に職場に復帰しなければならぬのだ。

よし決めた。今日復帰しよう。

この人はどうしよう？

うん、働かせよう。

ちょうど人手が足りないし。

良かった。解決した。

眠い頭でそんな事を決めて、一の巫女は眠たげな三白眼で、春信を振り返った。

要約すれば、ミシヤグジ探しは長期戦になりそうだから、活動しやすいよう、まずはこの世界に溶け込むべき。お仕事を手伝ってみませんか？

という一の巫女の主張はもともとだと春信は承諾した。

元々春信は身体を動かすのが好きだし、見知らぬ世界、見知らぬ風習に触れるのは、大変だが楽しくもある。

何より居候生活が長引き、ちょっと肩身が狭かったのだ。

ちなみに三日目ぐらいに春信から申し出たこともあったのだが、時期尚早だったのか、やんわり固辞されていた。

本宮門前町から上原城の城下町、下社秋宮と姫の宮を往復しながら、春信は散々にこき使われた。

なかなか容赦ないが、小気味よくもあった。

今朝からずっと機嫌の悪かった一の巫女も、笑顔を見せるようになった。

小雨が降り、二人は重い荷物を担いだまま、走る。

土道の道はぬかるみ泥が跳ね、膝から下を汚く汚す。

濡れそぼって 姫の宮に駆け込む。

二人は顔を見合わせ、笑いあった。

そして、春信が戦国時代に来てから、二週間目の夜を迎えていた。

現在でも諏訪下社周辺は一級の温泉地だ。

この戦国時代においても、それは変わらない。

三層になった 姫の宮 のもつとも外にある男湯も、もつとも内側にある女湯も、源泉掛け流しで豊富な湯量を誇っている。

十人くらいは同時には入れそうな、大きな露天風呂だ。

そこに春信は一人で浸かっている。

実は女湯である。

実のところ、春信は一度、切り出したことがある。

「……おれ、雷太たちの屋敷に移った方がよくないですかね？」

心ナシか、初日再開した時はあんなに感謝感激に輝いていた雷太の目も、ここ数日はうつろなほど冷ややかになっていた。仕事で出会った他の男達もあまり友好的とは言えなかった。

その原因は 一の巫女 と恋仲であると思われることと、男子禁制の女の園に住み込んでいるからに決まっている。

すれ違うときに「おのれ 一の巫女 を……」「一の巫女 さまを……」と怨嗟の声が聞こえてくることもある。

このままだと男友達が永遠に出来そうもない。

そんな気持ちを知ってか知らずか、 一の巫女 はくすりと笑っ

た。

「いえ、大丈夫ですよ。それだと、姫さまとの約束に反してしまいますし、姫さまが気軽に会えなくなってしまうです。万が一姫さまが男郭に会いに行かれてしまいますと、それこそ取り繕えない騒ぎになりますし」

姫さまに慕われていることは、春信も自覚している。

ただ、相手は諏訪家の大切な姫だし、何よりまだ子供だ。

そして春信は生まれ育った時代に帰るつもりでいる。

「気持ちに応えて上げることは出来ない。」

姫さまは初めて人を好きになり、自分でどうして良いか分からなくなっているだけで、そこまでは望んでいない、と一の巫女は断言するのだけれど。

ちよっと自信がなくなるほど、距離感がおかしいときがある。

湯船から桶でお湯をくみ、杉の床几の上に腰掛ける。

湯に入る前に、入念に汗を流して、手で擦り軽く垢も落として入る。しかし石鹸がないため、しっかりと垢を落とすのは、お湯に浸かってふやけさせる必要があった。

へちまたわしをお湯でぬらし、さあ身体を洗おうとしたとき。

がらがらと湯殿と脱衣所を仕切る引き戸が開いた。

慌てて春信はへちまで股間を隠した。首だけで振り返る。

温泉の照明は、月の明かり、星の明かりしかなかった。

揺らめく湯面に淡い光が反射し、その光が集まる場所はライトアップされたようにくつきりと浮かび上がるが、洗い場の隅などは漂う湯気のせいもあって、完全な闇に閉ざされている。

脱衣所から出てすぐの場所は、建物の影響で、幾分暗くなっている。

小柄で、巫女装束を着ているようではあるが、顔までは、判別できない。

しかし、向こうは春信の姿がはっきりと見えるはずだ。春信はあえて明るい場所を選んで身体を洗っていた。暗い場所は本当に暗くて怖いのだ。

「すみません。すぐ出ますから」

呼びかけても、小柄な巫女は、出て行こうとしない。もじもじ、もじもじ、と身体を揺すっているだけだ。

しばらくして、

「おっ、お背中をお洗いたく存じます」

高くうわずった声でそう言った。

「……姫さま？」

「……いえ、違いますよ。五の巫女ですよ」

白々しくそう言って月明かりの中に歩み出てきたのは、やっぱり姫さまだった。

よく胸元を見ると、五と印された五の巫女の衣装を着ているようだ。五の巫女はちょうど姫さまと同年代。おかつは頭の元気な女の子だ。服を借りてきたのだろう。

「お背中、自分では手が届きません。わたし、洗います」

「さすがに姫さまにそういうことをして頂くのは……」一の巫女にも怒られてしまいますし」

こんなところを見られたら、烈火のごとく怒られるのは確実なのだが、一の巫女の名前を出したのは失言だった。

姫さまが唇をとがらせた。

姫さまはぶんぶん首を左右に振り、

「私は、五の巫女です。お背中お洗いするのがお仕事です」
固い声で言う。

「えーと……」

春信は返事に困った。

どうしよう、これ。

硬化した姫さまを説得するのは難しそうだ。少なくとも春信の交渉力では。

背中だけ流して貰えば、きっと姫さまの気もすむだろう。断つてすねられて、後でなだめるのも大変だし、押し問答を続けるよりも、早くすむ。

「じゃあ、背中だけお願いします」

と言って春信はへちまを渡した。

姫さまはうれしそうに受け取り、ごっしごっしと真剣に春信の背中を擦り始めた。

一の巫女 は報告したいことがあり、姫さまを捜していた。

頑強に作られてはいるが、十名に満たない女が生活するだけの、こじんまりとした屋敷だ。端から順番に見て回って、見つからないはずはないのだが、ドコにも居ない。

まさか外に出たのかと心配しかけて、もう一つの可能性に思い当たった。

骨太郎（骨さま、骨さんの呼称が 姫の宮 で定着しつつあった）が入浴中の温泉だ。

さすがにそれは、と思う反面、あり得るとも、心が警鐘を鳴らす。

一の巫女 の足が温泉に向く。

姫さまは近いうちに、諏訪家の命運を背負い、どこぞの大名家に嫁ぐことになる。もし今万が一、よからぬ行為を行い、おなか膨らむような事態になれば、姫さまも、生まれてくる子供も、孕ませた男も、一生の罪科を背負うことになる。

姫さまにそのつもりはないのは確認済み。

骨太郎にその覚悟がないのも、見てれば分かる。

なのだが、どうにも姫さまは感情を持ってあましており、男は……あまりにも押しに弱すぎる。流されそうで怖いのだ。誰かが抑制して上げなければならず、その役目を果たせるのは自分しか居ないと、一の巫女 が干渉するものだから余計に姫さまは意固地になっっていたりする。

ちなみに他の巫女達はそんな三人の様子を呆れて見てたり、にまにま見てたり、横から春信にちよっかいを掛けてみたり、姫さまを焚きつけたりと、好きに楽しんでるもんだから、余計に 一の巫女 は自分が頑張るしかないと思いつめ……悪循環だった。

姫の宮 の女湯と母屋は、渡り廊下で繋がっていた。

というより、この廊下を通らなければ、温泉施設にたどり着けないようになっている。

その廊下の先、姫さまの衣装を着て、脱衣所の引き戸に背をもたれさせ欠伸をしている 五の巫女 を発見。彼女は指先が器用で、

姫の宮 では仕立てや縫い物を担当している。姫さまと年も近く、仕事柄 姫の宮 に籠もることが多いため、姫さまの遊び相手を良く務めている。要するに姫さまを焚きつけている張本人だ。

「あつまずい」

一の巫女 に気づいて慌てて立ち上がり、引き戸を開けて中に逃げようとする彼女をとっ捕まえる。「今のわたしは姫さまであるぞ！」とのたまう彼女の耳を引っ張り、「痛い痛い！ うそごめんなさい！」と謝る声も無視し 一の巫女 は脱衣所の中に進んでいく。

「もういいですよ？」

「いえ、まだまだ、まだまだ」

を幾度か繰り返し。

春信の背中がそろそろ赤くなったころ。

脱衣所の方から、ドタバタとした騒音が聞こえて来た。がらがらと脱衣所の引き戸が開く。

「ひーひーめーさーひーまーひー」

五の巫女 の耳を引っ張るようにして、 一の巫女 の登場である。

姫さまはわたたと慌てて、へちまを取り落とした。

しかしすぐに拾い直し、春信の背中を擦る作業を再開した。

一の巫女 は 五の巫女 を投げ捨てるように解放し、つかつかと歩み寄ってきて、姫さまの手首を掴み、春信から引きはがした。

一の巫女 が、姫さまと春信の間を裂くようにして、立つ。

反省を促す視線で姫さまを見下ろす 一の巫女 。

姫さまは、見上げ、

「絆は骨さまとずっと二人で居るくせに私の時は邪魔ばかりするの、ずるいですー!」

抗議の声を上げる。

春信に背を向け、一の巫女 はこんこんと姫さまに説教を始めた。

姫さまは唇を尖らしながら、ふてくされている。

時たま「絆はずるい、ずるいです」と半分涙声で反発する。

春信は両手で股間を隠しながら、背中を小さく丸め、出来るだけ気配を消すことに務めていた。

姫さまと一の巫女 の口論は何度か経験している。その口論の途中、結構な確率で一の巫女 の矛先が春信に向くのだ。

この格好でそれは、やばい。
勘弁して欲しい。

横合いから、そろりそろりと五の巫女 が近づいて来ていた。

春信が気づき、視線を向けると、ぴたりと五の巫女 の歩みが止まる。彼女は口元に指を一本当てて、黙ってての仕草をした。

声を出すべきか沈黙を続けるべきか、春信は逡巡した。

後になって、この時、声を出さなくて本当に良かったと、春信はつくづく思ったものだ。

五の巫女 は一の巫女 の背後に忍び寄ると、一の巫女 の着物の背中を掴んで、思いつきり春信の方に引き倒した。

「きゃっ」

可愛らしい悲鳴を上げ、一の巫女 はたたらを踏むように春信の方によるめく。

床几に座っている春信の背中に乗っかるようにして。慌てて春信は彼女の身体を両手で支えるも。

どっばーん。

二人もろとも、お湯の中に転落。

「うちとつたりっーっー！」

おかつば娘が勝ちどきを上げる。

姫さまは心配そうに後ろを振り返りながらも、おかつば娘に手を引かれながら逃げていった。

人が水中で息を止めていられるのは、心の準備を整え、大きく息を吸って潜るからに他ならない。

突然放り込まれると、泳ぎの得意な者でも慌てふためくものだ。

ましてそれが、熱いお湯の中。

春信は本能のまま、水面に顔を出そうともがいた。

しかし、柔らかいものに阻止され、たどり着けない。

なんだっ、と思つて手で押すようにつかむ。

ふにつふにつ。ふにつふにつ。

「きゃっ！ やっ！」 黄色い声が水上で響く。

一の巫女 のおっぱいだ！！

「じふっ！！」

突然の事態に慌て、春信はお湯を飲んだ。

男が乳の谷間に顔を挟まれ悦に入っているのは、心の準備をして大きく息を吸って埋めるからに他ならない。

突然押しつけられると、経験豊富なものでは慌てふためくものだ。ましてそれが、経験のない未成年で、お湯の中。

柔らかい感触が顔に張り付くものだから、春信は余計に焦って起き上がるうと、もがく。すでに肺の中の酸素はほとんどはき出してしまっている。

かたや 一の宮 は春信が下で暴れるから、身体が斜めに傾いたままで、足の裏が底に付いた、と思ってもすぐにはがされ、思うように立ち上がれない。

「やっ、ちよっ！ やめなさっ！」

一の巫女 は春信の身体を押さえつけ、大人しくさせようと必死だ。

足場の安定しないお湯の中で、押しつける者と、押し上げる者の間で、拮抗した勝負が続いた。

「おとなしくっ！ がぼっ」

一の巫女 がお湯を飲み、完全に両足を滑らせた。

「がぼっがぼっがぼっ」

二人絡み合って、お湯の中に沈んでいく。

春信は湯の中で 一の巫女 の身体を抱きすくめるように押しつけ、なんとか水面に顔を出した。

春信は、むさぼるように息を吸う。

一の巫女 の無事を確認しようと顔を向け、

春信は見惚れた。

月明かりの下、濡れて張り付くどころか、一の巫女 の着物は完全にはだけ、上半身がむき出しになっていた。

湯に温められ、桃色に色付いた身体。「……」ほっ、……「ほっ」と咳き込む彼女に合わせ、乳房が揺れ、ほっそりとした腹部がへこみ、膨らみを繰り返している。

後ろにまとめて結わえられていた長い髪がほどけ、身体に艶めかしく絡まっている。

肺に入った水を出し切り、荒い息をつきながら、彼女は腰に手を当て、上体をやや反らした。

その姿勢のまま、酸欠なのか、とろんとした目で月を見上げていたが、春信の視線に気づき。

「……っ！」

一の巫女 は、頬を赤く染め、唇をかみしめ、目に涙を溜め、両腕で、豊かな胸元を隠した。

それから、右手を振り上げ、思いつきり、春信を引っばたいた。

春信はお湯の中に沈んだ。

次の日の朝、春信と五の巫女の朝食は、ありませんでした。

昨日あんな事があったので、避けられるのではないかと思っ
たが、そんなことは全く杞憂であった。

しかし前日までと比べ、一の巫女の人使いは荒かった。

普段は男連中で分けられていた薪割りや重い荷物の運搬などが、
春信に集中していた。

春信は喜々としてその仕事を、いつそ昨日よりも手早く片付けて
いく。

昨日の役得のけじめとしては、安すぎるくらいだ。これならむし
る毎日でも歓迎したい。

春信の仕事ぶりを見て、半ば啞然としていた一の巫女は、取
り繕った笑顔を浮かべ、

「せっかくですから、明日の分の薪割りもお願いいたしますね？」
有無を言わせぬ口調で言うが、何がせっかくなのかはおそらく本
人も分かっていない。

それでも、春信は快く了承した。

そして、肉体労働ばかりを反復すると、ちょっとした合宿気分が
湧いてくる。

そうになると、とたんに物足りなく感じるから体育会系とは不思議
なものだ。

この程度では、名門である剣道部の合宿よりも生ぬるいのだ。

いわんや、竹田道場の特別合宿なら、前菜か準備運動でしかない。

特別合宿は、高段者の中でも機動隊や特殊部隊に就職しているよ

うな連中のみが参加している。指導するのも、機動隊や特殊部隊で教官を務めているような連中だ。

個々の限界を見定めて訓練を課していると、主張するのだが、『限界』というものの価値観が、かなり人類と乖離していた。

春信は高校一年の時にやっと参加を認められて、喜び勇んで出向いて、三度げるを吐いた。高校二年の時は「去年の俺とはひと味違うぜっ」と合宿のための合宿までして挑んだのだが前年よりも過酷な修行を課せられ、五度げるを吐いた。特別合宿は真冬に行われるため、高校三年度はまだである。

きつと一の巫女が春信の朝食を抜いたのも、吐くほどの苦行を与えるつもりだからだろう。

さあ、来い。来るがいい。

身体は十分に温まった！

準備運動はお終いだ。

俺を吐かせる試練を与えてみる！

荷物を背負えばダッシュをして、五日分の薪割りタイムアタックで片づけて、春信は一の巫女を仰ぎ見た。

一の巫女 は内心辟易していた。

八つ当たりの気持ちもちよつとはあるが、本当のところは反抗して欲しいのだ。

この男の最大の欠点は、押しに弱いところにあると、一の巫女は確信している。このままでは姫さまに縋り付かれてあっさり一線を越えてしまい兼ねない。場合によっては戦場に引っ張り出されて、死んでしまうかもしれない。

出来ないのなら出来ない、やりたくないならやりたくない、断ればいいのだ。理不尽なら理不尽だと、抗議すればいいのだ。一の巫女はこの数日に何度も彼を叱ったが、その内の半分くらいは理不尽な理由であるし、実際今日のこの仕打ちも理不尽なのだ。さすがに、こなせない量の仕事を押しつけければ、否応なくそうなると思っていたのだが……。

この鍛えあげられた変態め。

正直、薪ばかり増えても置き場所に困るので、仕方ないから一度運ばした重い荷を「あら？ ごめんなさい。間違えました。元の場所に戻して頂けますか？ おほほほ」なんて三往復やってみたのだが、

「はい。お任せください！」

ぱつと顔を輝かせて、背負い直して走り出す始末である。

褒美を与えてるんじゃないやありません！ いじめてるんです！

一の巫女 は危うく声に出して叫びそうになった。

「……はあ、もう良いです」

疲れたようにため息をつく。

なんだろう、労働力としてはとても頼りになるのだが、男としてはどうにも頼りなく感じるこの気持ちは。

「今日はもういいので、そろそろ行きましょう」

仕事を手伝わせるようになってからも、合間合間にミシヤグジ神の搜索は続けている。

本当のところは勝算もなく名所巡りをするよりも、守矢一族や諏訪惣領家の人間しか入れない聖域や、古い文献を調べた方が、まだ何かある可能性はありそうなのだが……。

聖域への立ち入り許可など、よそ者に許されるはずがない。申請した時点で大目玉を食らう。

文献に関しては守矢絆が一人で読むなら、認められるはずなのだが……。

残念ながら、今はちょっと父たちの機嫌が悪いため、申請を控えている。

だから打つ手もなく、特に期待することもなく、一の巫女は義務として、二人きりの散策を続けていた。

同じ相手と、繰り返しこのような行動を取ったことは、守矢絆の経験にはなかった。

穏やかにして、少し胸の奥をくすぐる時間が流れていく。

姫の宮 は上社本宮に小さな店を出している。

店の看板は、 姫味屋 となっている。読みはひめみやだ。開店当初は 姫の味屋 だったそうだが、それでは会話の途中に 姫の宮 か 姫の味屋 か分からないので、 姫味屋 に変えられたそうである。

その上社本宮にある 姫味屋 に牛乳を運び込んでから、上社前宮にミシヤグジを探しに行くのが、半ば日課となりつつある。

仕事の合間に抜け出してデートをしているようであり、春信としてはちよつとこつ、気持ちこそわすれず。

惨劇のあつた場所も、幾分は落ち着いていられるようになった。戦国時代といつても、戦でもない限りは、そうそう殺人事件など起こらないらしい。

諏訪の内部で争いのあるあつた数十年前は酷かつたそうだが、今は諏訪惣領家によつて統一されている。

住んでいる人たちは、何世代も前からの親戚で、顔見知りばかり。不祥事を起こせば親兄弟どころか一族全てに迷惑が掛かるため、子供の頃から厳しく躾けられている。

あちこちに関所があり、そこを通過して入国する者は、手形を与えられ、それを首からかけておく義務を課せられる。もちろん、関所を出るときにそれを返すことになる。

だからそれなりに治安は維持され、諏訪湖周辺で殺人が起きたのは数年ぶりになるそうだ。

「惣領家に目を付けられることをしなければ、そんなに怯えることはありませんよ」

とは 一の巫女 の言。

暗に姫さまとの距離感を保つよう、警告されたただけなのだが。

しかし実際、春信はとうの昔に目を付けられていた。

拝殿の前で堅く目をつむり手を合わせ、祈る春信とその横に佇む

一の巫女 を、五人の男が取り囲んだ。

歳は十五から二十五ほどだろうか。

それぞれが名乗りを上げ、彼らの代表が要件を告げる。

曰く。私どもは、姫さまの護衛を務め、不本意ながら戦死した者の身内である。姫さまを救って頂いたことを、亡き父や兄に代わり、お礼申し上げます。

これから私どもは父や兄に代わり、家督を継いで、諏訪のために尽力いたします。

ただ突然のことでもあり、私どもは自分自身にいささか自信を持ってずにいます。

誠に勝手な申し出ながら、我々が自信を持って家督を継いでいけるよう、七人の不屈き者を撃退したという貴殿の優れた剣術を、御指南頂けないでしょうか。伏してお願いたします。

言葉遣いは丁寧ながら、有無を言わせぬ口調だ。

明らかに、決闘の申し出だ。

ど、どうしよう？

一の巫女 は蒼白となった。

彼ら五人の顔に、見覚えはあった。彼らが亡くなった護衛の身内であることは間違いない。

諏訪の中で、骨太郎にとって好ましくない噂が流れていたことも知っていた。

姫さまを救ったという剣士が、敵方の間者で、姫さまを罠に掛けた張本人なのではないか。または、護衛たちが命を持って敵を退けた後に、のこのこ姿を現せて手柄をかすめ取ったのではないか。

要するに諏訪の人たちにとって、謎の異国人が英雄であることは気に入らないのだ。

そしてこの手の噂を口にする者は、死んだ五人の一族か、親しかった者たちが多い。姫さまを守りきれずに死に、その敵をどこの馬の骨とも分からないものが撃退した。はなはだ不名誉なのだ。死んだ者も浮かばれず、残された者もいたたまれない。

それを緩和するこの手の噂はしばらく容認すべきであり、一の巫女も刺激しないように放置していた。

ただ、このような行為に及ぶであろう事は、想定していなかった。

噂はどうあれ、おおやけには姫を救った人物として、神殿と面会し、褒美まで賜っている。今は下社大祝である、さや姫によって匿われている。

そのような人物を諏訪惣領家の許しもなく襲って、ただで済むはずはない。

とまで考えて、一の巫女は慌てて付近を見回した。

居た！

この場を見下ろせる小高い丘の上に、見える範囲で十人前後の侍

を発見する。

一人は、高齡。わざわざ床几まで持ち込み不貞不貞しくも高みの見物を決め込んでいるその男は、千野伊豆入道。諏訪惣領家の重鎮中の重鎮だ。

この決闘を諏訪惣領家は知った上で黙認しているのだ。

申し出されて許可を出したのか、それとも惣領家が命じたのか。

諏訪惣領家の目的は、いったい何なのか。

頭の中を高速で回転させるが、憶測できても結論が出ようはずもない。

今、大切なことは。

この状況を切り抜けることだ。

一の巫女 は骨太郎を庇うように、一歩前に出た。

「本当に勝手な申し出ですね」

意識して冷たい声音を作り、一の巫女 は先頭の若者に告げる。諏訪惣領家の許可を受けて、さらには監視も居る状況なら、相手も自暴自棄にはならないだろう。自分が攻撃される危険はかなり少ないと判断。

「お帰りください。だいたい、五人で一人を囲む性根が気に入りません。男らしくありません。私どもが、そのような申し出を受けるいわれはありません」

そう告げると、男は悔しそうに唇をかみしめたが。

「その方は、七人の不屈き者を撃退したと聞いています」

引き下がらなかった。続けて、

「受けて頂きます。でなければ……」
そこで言葉を濁した。

「たとえ無理矢理でも、受けて頂きます」
説明を放棄し、毅然と、顔を上げた。

これで確定した。

彼ら五人は、千野伊豆入道に勝負を強要されている。

一の巫女 は、そう判断した。

「少し、二人で相談させて頂きます」

と、五人に断りを入れてから、春信の袖を引き、木陰へと誘導した。

「彼らは本心から戦いたいわけではありません。何らかの言いがかりを付けられ、あそこにいる千野伊豆入道に強制されているようです」

春信は 一の巫女 の視線を追う。

謁見の場にいたあの爺さんの姿がそこにあつた。

「諏訪惣領家も諏訪大社も、あなたの足跡を辿ることが出来ずになります。ですので、嘘か誠かそれを量る判断材料として、せめてあなたの腕前だけでも確認したいのでしよう」

「……………」

「伊豆入道が彼らを脅した言いがかりに、思い当たるものがあります。姫さまの警護に当たる者たちは惣領家の人間で、姫さまの監視も兼ねています。姫さまの外出時には、前もって惣領家に報告し許可を得なければならぬのですが……」

ちよつと言いよどみ、

「しかしあの日は、朝早く姫さまが前宮に行きたがったのです。警護の者は姫さまのために報告を後回しにしてくださいました。その責任を今更ながら問われたのかもしれませんが」

「死んだ人の責任を、残された家族が、取らされていると言つことですか？」

一の巫女 はその問いかけを無視した。

「これは 姫の宮 の失態です。 姫の宮 が責任を持ち、交渉で対処します。この場は私に任せて、あなたは全力で走って逃げてください」

「……あなたを置いて逃げれるわけないでしょう」

春信が答えると、一の巫女 は苦笑した。

「私は諏訪大社神長官、守矢頼真の娘ですよ。彼らは絶対に手を出しません。万が一、打たれば、それこそ千野伊豆入道さまも慌て動きます。この場はそれで収まります。そうならばたくさん慰謝料をせしめることが出来ますわね」

一の巫女 の笑顔は、どう見てもわざとらしい。

本人も自覚したのか、真面目な顔になって、
「どうしても心配なら、はやく本宮から守矢の人間を連れてきてください」

そついう問題ではなかった。

男が女を置き去りにして、自分だけ逃げれるはずがない。

取り囲まれたときは、頭が真っ白になり、ただただ立ちすくんでしまったが、今は違った。怒りで頭が沸騰しそうだった。自分自身に対する怒りだ。

女に庇われてどうするんだと、自分自身を殴り飛ばしたい。
死ぬ恐怖も吹っ飛んでいる。

こんな自分は死ねばいいとすら思うのだ。

春信は彼らに歩み寄った。

一の巫女 が慌てて付いてくる。

「受けて立つ。その前に聞きたい。あんたらは何のために戦う？
強要されているのか？ 返答次第によってはただでは済まさない」

これではどちらが喧嘩を吹っ掛けたのか、わかりはしない。

「戦う必要はありません。ここはわたしに任せて頂きます」

一の巫女 が間に入って取りなそうとする。

「父や兄の名誉のため。そして俺たちの意地のためだ！」

先頭の男が、紅潮した顔で、早口でまくし立てた。

「負けてくれとは言わない。勝っても負けても、父の名誉も、俺の

名誉も守られる」

別の男が青白い顔でそれに続き、

「証明して欲しい。あんたが本当に姫さまをお救いしたって言うんならさ」

「俺たちはあんたを恨むべきなのか、それとも感謝したらいいのか、どっちなんだ」

春信には重なつて見えた。

両親を失つて、道場を支えるんだ、恋を守るんだと、気負つていた自分に。

父の名を汚さないよう、父の名が剣道界から消えてしまわないよう、父を超える剣士になろうと決意した自分に。

あの頃は子供ながらに必死だった。

見当違いな気負いだったが、その想いに祖父や師匠たちは応えてくれた。

伊豆入道の仕打ちを、酷いとは思わなかった。伊豆入道はただ機会を用意しただけなのだ。

此処にいる者たちは強要されたから戦うのではなかった。

守らなければならぬ誇りのために、家族と、己のために戦うのだ。

春信は彼らに強く共感していた。

身体の奥底から歓喜が湧いてくるほどだ。

男が木刀を春信に差し出す。春信がそれを受け取る。

「こんなのは理不尽です！」

一の巫女 がその木刀を取り上げようとする。春信は彼女を押し
のけた。

「理不尽じゃない。彼らには戦う正当な理由がある。家族が殺され、
その名誉を己の勇気で証明しなきゃならない」

「あなたにはありません」

「ある」

「何が!？」

春信は 一の巫女 にまっすぐ見つめた。

「一の巫女 さん。俺を信じて欲しい。俺は確かに姫さまと雷太
を助けた。それを証明する。そして俺自身に、俺を証明する」

「証明する必要はありません……仰る意味も分かりません」

春信は 一の巫女 から彼らに視線を移した。

「待たせた。さあ、始めよう」

春信を中心に、男たちは半円形に距離を取り、木刀を構えた。

春信の正面、リーダー格らしい25才前後の男が、一步前に出た。背はさほど高くないが、横幅は春信より広い。

城南丈太郎友通、と名乗りを上げていたが、他の四人の名と同じく、春信の記憶には刻まれていない。

「おりあああああー！ー！ー！ー！ー！」

丈太郎が、先に仕掛けた。

大上段に構えて、踏み込み、木刀を振り下ろす。

何の変哲もない打ち下ろし。

春信は木刀で、辛うじて、受け止めた。

春信の心臓は必要以上に小刻みな鼓動を刻んでいた。目が霞むように、コマの欠落した映像を見ているようだ。

両足の感触もいまいちおかしい。まさに地に足付かぬ状態で、まともな足裁きは出来そうもなかった。

相手の動きを見た瞬間に、腰が引けてしまい、対応が遅くなっていた。

それを自覚したことで焦りが増大し、身体の制御が、より覚束なくなっていく。

剣道には剣道基本形という木刀を使った練習方法もある。

昇段試験にも取り入れられており、春信は幼少の頃から木刀を与えられ、竹刀ほどではないにしても、手に取り、振り続けてきた。

だからやれるはずなのだ。振り慣れた得物なのだ。なのに、身体が言うことを聞かない。

一度距離を取ってから、男がもう一度、仕掛けてくる。

「おりゃーっ　りゃーっ！！」

数度の打撃を、春信は木刀ではじき飛ばす。

丈太郎が、飛び退くように身を引き。

今度は木刀を寝かせて、突きを繰り出してくる。

春信は上から木刀を被せるようにして、攻撃を反らした。丈太郎が前のめりに体勢を崩す。その瞬間、春信の網膜には、男の無防備な背中のみが映っていた。

打とう、と身体が動きかけるのを、春信の意識が迷い、その間に丈太郎は這いつくばるようにして間合いから離脱する。

滑稽な様だった。

その滑稽な動きが、春信に気づかせた。

春信は目をしばたたき、丈太郎を見やる。

そして、なんだ、同じじゃないか、と笑った。

この程度の攻防で、城南丈太郎友通は大汗をかき、すでに肩で息をしていた。

他の四人を順に見やる。

落ち着かないのか、同じ場所で無意味に足を動かしている者や、何もしていないのにすでに荒い息をついている者も居る。

誰も彼もが顔を強ばらせて、二人の戦いを見つめている。

死ぬかもしれない、殺すかもしれない、木刀の喧嘩だ。

平常心で始められるはずがない。

彼らも怖いのだ。

どんな時代に生まれようと、どんな時代を生きようと、当たり前前に怖いのだ。

春信は肺の中の空気を、全てはき出し。

それから、ゆっくりと深呼吸する。

「おおおう、りあああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

丈太郎の再度の打突を、今度は余裕を持って受け流す。隙だらけとなった右腕上腕に、木刀を加減して打ち下ろす。

「っ！！」

たまらず丈太郎が木刀を落とし、無事の左手で拾い取る仕草をするも、春信の追撃を警戒して諦め、距離を取った。

春信はその木刀を拾い、男の足下へと放った。

周りとの間合いを計りながら、その場で足踏みを行う。

それから、前後左右に小さく、足裁きの基礎を、ゆっくり確認するように、すり足で前後左右に。徐々に速度を上げる。

大丈夫だ、動く。

俺は、動ける。

丈太郎と入れ替わるように、中肉中背で特徴の薄い青年が、春信の前に立った。

「……」

無言で中段に構え、探るように誘うように、木刀の剣先を動かしている。

二度、三度とフェイントを入れてから、春信の小手を狙ってくる。春信は二足の動きで難なくかわし、逆に青年の上腕に木刀を落とす。

「二人で、掛からせて貰います」

春信と同じ歳くらい、ひよろりとして、春信ほどではないが背が高い男が宣言。

「うん。どうぞ」

もう一人春信と同年代、やや太り気味の男と、15才くらいの少年が、互いに顔を見合わせた。

結局、勝ち気そうな最年少の少年が、前に出る。

春信を挟み込むように、二人が位置取りする。

春信は細身の男に木刀を向けながらも、左足を引くようにして、少年も視界に納める。

少年が、春信の背後を取るように動く。

春信もまた身体の軸を動かし、視界から逃さないように動く。

少年が声を張り上げ、春信に打ち込む。そのタイミングに合わせてるように、細身の男も距離を詰める。

春信は剣道の足捌きで身を移す。

標的を失い、同士討ちになりかけ、少年が慌てて木刀を止める。

ひよろりとした男が一拍遅れて春信に身体を向ける。

が、遅い。

春信は男の右腕をびしりと叩き、木刀を落とさせると、少年にも。

打ち込もうとした動作を止めて、右後方へと跳ねるように距離を

取った。

春信が居た空間を、ぶんつと木刀が通過する。打ち込んで来たのは、丈太郎だ。四角い顔を歪ませ、まだ様子見を決め込んでいたやや太り気味の男を睨み付け、

「とうしろっ！ おまえも加勢しろ！」

怒鳴りつけた。

それから春信に向き直り、

「全員で行かせて貰います。かまいませんね？」

「もちろん」

春信はどう猛に顔を歪ませ、受けて立つ。鼓動はすでに平常時と変わらないレベルにまで、落ち着いている。身体の制御は完全に取り戻している。動いたことにより、身体が動くようになっていく。

五人が間合いを計りながら、春信を取り囲む。

これが真剣での勝負なら、五人の内、すでに三人は腕を失い、戦線に参加できないはずだ。木刀でも、春信が本気で打ち込んでいれば、骨が砕け、うずくまっているしかない。

が、これは試合ではない。
模擬戦でもない。

彼らは彼ら自身と家族の誇りを、そして春信は春信自身を証明す

るための戦いだ。

だから春信は彼らを殺すつもりはない。

殺すつもりはないが、自分がどれだけ強いかを、彼らに思い知らせる。何度でも立ち上がって挑んでくるなら、何度でも叩き伏せる。伊豆入道にも見せつける。自分がどれだけ強いのかを。

そして何より、自分自身に。

自分は強いのだと、言い聞かせる。

歴史が違うのだ。

戦国の世に生まれ、江戸の初期にあまたの剣術が乱立する。

太平の時代に下火となり、しかし幕末になり、剣術は隆盛を極めた。

明治になり一度は消えかけるも、西南戦争における薩摩示現流、警視抜刀隊の大活躍により、もう一度開花する。

700を超える流派から優れた剣士が招かれ、新政府の下でたった一つの流派が生まれる。

剣道が生まれた。

それがこの国の剣が歩んできた、いや、これから歩いていく道なのだ。

この道の先に、じいちゃんが居て、おやじや師匠たちが居て、自分が居るのだ。

俺は強い。

どれだけびびろうとも、俺は強い。

じいちゃんの、師匠たちの、恋の、父の、母の、友達の、ライバル達の顔を、思い浮かべる。

負けるはずがない。

じいちゃんや師匠たち、そしておやじが、こんな試練に、こんな

時代に、五人どころか、百人だろうと。

だから俺も負けるはずがない。
負けて良いはずがない。

「おおおおおおおおおっ!!!」

腹の底から、雄叫びを上げる。

春信は風を巻くように踏み込んだ。

185センチの上背、背筋をしっかり伸ばしたまま、

「めんっ!!!」

五人のリーダー、その額の数センチ前で、寸止める。

ぴくりとも動けないまま、丈太郎は目を見開く。

二回、三回と瞬きしてから、丈太郎は「うわわっ!!」と悲鳴を上げて距離を取ろうとする。

逃げる男の左腕に木刀を叩き込み、更に腹部にも打ち入れる。

男達の動きが止まったのは、数秒だった。

一斉に群がってくる。

中肉中背の男が、春信の背後から迫り、背中を打ち据えようとした。

春信は振り向き様に男の木刀をはじき飛ばし、がら空きとなった腹部に切っ先を突き込む。

勝ち気そうな少年が繰り出す横合いからの打突を、真後ろへの足運びで避け、無防備に差し出される両腕に木刀をたたき込む。ひよろりとした男の打ち下ろしを半歩の動きでかわし、太ももにきつい一撃。

全く参加しようとしていなかったやや太り気味の男も、すごい形相で「ひゃああああっ」と雄叫びを上げつつ木刀を振り回し、春信に勝負を挑んでくる。

春信はすつと身を引き空を斬らせた後、肩口、肉付きの良い部分にたたき込んだ。

崩れる彼の後ろから、丈太郎が躍り出てきて、大上段に打ち込んでくる。

頭上で受け止める。受け止めただけで、丈太郎の木刀が弾かれた力が入らないのだろう。右腕も左腕も強かに打たれており、赤い痣が走っている。それでも丈太郎は木刀を拾い上げ、下から切り上げるように春信の胸を狙った。

春信は、対の先で丈太郎の右腕に叩き入れる。

丈太郎の木刀が地に落ち。

もう一度、丈太郎は木刀を拾おうとして手を伸ばす。指に力が入らず、すくい上げた後、取り落とす。

春信が上から見下ろす。

丈太郎が歯を食いしばりながら、下からにらみ返す。

「うおおおっ!!!」

丈太郎は雄叫びを上げると、素手のまま春信に体当たりを仕掛けた。

春信は手にした木刀を高く振り上げ、後ろに投げ捨てた。

丸腰の相手には自ら丸腰となり、がっちりと丈太郎を受け止め、背負い投げ。

期せずして、というか当たり前に、春信は素手の状態で、四人の木刀を持った男達に、取り囲まれた。

正直興奮しすぎて、調子に乗りすぎたと反省する。

しばらく四人は打ち込むべきかどうするべきか、躊躇していた。しかし、中肉中背の男が、迷いごと投げ捨てるように、ぶんつと木刀を放り投げた。次々に残りの男達もそれに習う。

春信はにやりと笑う。

飛びかかってくる五人の男たちをちぎっては投げ、ちぎっては投げ。

殴り込んでくる拳をかわし、殴り飛ばし。

かわしきれずに殴られたり、蹴りを入られたり、蹴り返したり。腹に体当たりをくらい、仰向けに倒され、馬乗りされそうな所を巴投げのように蹴り飛ばし。

転がって起き上がり様、掛かってくる男に頭突きをかます。

どれくらいの間、経っただろうか。

春信一人、ふらふらになりながら立っていた。

乗り越えた、と確信する。

春信はずっと怯えていた。

戦国初日に遭遇したような状況にもう一度放り出されたら、勝てないのではないのか、誰も守れないのではないか。

だが、そんなことは問題じゃなかった。

この場が終われば、またきつと怖くなるだろう。

人を殺せば、きっと後悔するだろう。
それでも自分は大丈夫だ。

戦わなければならない状況に放り出されれば、自分は必ず戦えるのだ。

春信は丘の上で高みの見物を続ける千野伊豆入道を睨み付ける。

「見たか、伊豆入道、俺は強い！」

腹の底からの大音声。

「俺は確かに、姫さまを救った！」

伊豆入道は、全く感情の読めない顔で見下ろしている。

「俺が、断言してやる！」

春信を取り囲むように、大の字になって寝転がってる者や、頭を振り、上半身だけ起き上がろうとしている者たち、そんな五人を春信は、両手を広げ、指し示す。

「あんたらの家族はみんな命がけで戦った！ あんたらみたいに、雄々しく戦った！ だから姫さまを守ることが出来た！ 俺は間に合うことが出来た！」

春信が来た時には、すでに彼らは殺されていた。

だから春信は見えていない。見えていないが、断言出る。

この五人の家族が、卑怯者のはずがないのだ。

勇敢に戦ったことを、保証できる。

「俺と彼らで、姫さまを救ったんだ！」

死んだ家族を思い浮かべてか、寝転がったり、しゃがみ込んだまま、五人の男達がすすり泣く。

春信も滂沱と涙を流しながら、伊豆入道を睨み付ける。

伊豆入道は、ゆったりと立ち上がり。

呆れたように、頭を振った。

それから、上社本宮の拝殿の方角に身体を向けて、お辞儀をした。ぱんぱんぱんつと、柏手を打って、祈りを捧げてから、もう一度神社に御辞儀する。

それが終わると、まるで自分は参拝に来ただけだと言わんばかりに、春信たちに背を向けて、去っていった。

春信は大きく息を吐いて、しゃがみ込んだ。

ふと、視線を感じて顔を上げると、とても怖い顔で微笑みながら、一の巫女 が睨んでいた。

伊豆入道が連れていた侍達の内、どうやら五人は、この男たちの親戚や寄親であるらしかった。

春信は一人一人から短い謝罪と礼の言葉を受ける。

それぞれの身内を励まし手を貸しながら、この場を離れていく。彼らが居なくなつてから、春信は 一の巫女 の背中に視線を移した。

「今日ここで出会った男たちがみんな風邪をひいて寝込みますよーに」

諏訪大社上社本宮の拝殿に両手を合わせて、一の巫女がそんな願い事をしている。

春信は情けなく頬をひくつかせた。

春信が戦っていた間、彼女は喧嘩を止めさせるよう千野伊豆入道に直談判していたようだ。で、相手にされなかった。かなり怒っている。申し訳ない。親戚たちの謝罪の大半はそれだった。

で、彼らは逃げるように退散してしまった。

伊豆入道とお付きの侍たちはこっちに降りてくることすらなかった。

後に残されたのは、春信と一の巫女の二人だ。

仕方なしに、春信は彼女の背中に声を掛けた。

「あの、一の巫女さん。そろそろ、帰りませんか？」

くるりと一の巫女が振り返る。無表情で、一步一步、歩み寄ってくる。春信は後じさりそうになる気持ちを、何とか押さえる。

「冗談です。そんなことは神さまにお願いしません」

「ですよね」

「あなたとじじいだけ風邪ひいて寝込め、と願っただけです」

「……」

「ところで、あたまは、大丈夫ですか？」

いたわるように春信の頬に手を当て、一の巫女が見上げてくる。

「はい。おかげさまで。身体のおちこちは痛いんですけど」

ははははと春信は後ろ頭をかきながら笑う。

「それは宜しかったですね……。ところで、頭は大丈夫ですか？」

「……」

一の巫女のおみ足が、春信の足を踏んでいた。ほっぺに当てられた手は、ほっぺをつねっている。

「……ご心配おかけして、もうしわけありませんでした」

深々と春信は頭を下げた。

「心配？ 誰が？ 誰を？」

面白いことを言いますわね、と口に手を当ててお笑いになる一の巫女。

「一の巫女さん。聞いてください」

真剣な顔で、春信は一の巫女に詰め寄った。

「な、なんですか？」

一の巫女が一步後ずさる。

「男には、戦わなければならないときがあるんです」

一の巫女が一步前に出て、春信の足を踏みねじった。

「……あたまは、駄目でしたか？」

じとつとした目で、にらまれた。

「……ご迷惑おかけしまして、もうしわけありませんでした」

深々と春信は頭を下げた。

「だいたい、剣の腕を見せると言われているのに、木刀捨ててどうするつもりですか？」

「……ごもっともです」

確かにあれは余計だった。

春信は剣道の腕こそ高校随一だが、相撲や柔道など嗜む程度ではない。拳の殴り合いなど、子供の頃に数回やった程度だ。

身体のおちこちが打撲で痛い。

正直、最初に木刀で痛めつけていなければ負けていたかもしれない。趣旨を考えれば無情でも木刀で完封して、実力を誇示すべきだったのだ。

だが、言われっぱなしも、男としてなんか悔しい。

「いや、あれはですね。ほら、姫さまから聞いていませんか？ っていうか、話しましたよね？ 俺が最初に現れた時、相手の真剣を奪い取った話。秘技・無刀取り！ 俺が姫さまをお救いしたと納得させるには、やはり無刀取りを見せるしかないと思いまして」

「それで、素手の喧嘩になって、ぼこぼこに殴られたと？ ……無様ですね」

「……………」

「だいたいです。一度ごもつともですと認めてから言い訳されても説得力がありません」

「……ごもつともです」

「伊豆入道さまが仰っていました。危なかった。危なく薩摩に預けるところだった。バカに凄いバカを預けて兵にまでバカが伝染するところだった。姫のおかげで諏訪は救われたわ！」と

えらい言われようだ。俺もだけど、薩摩さん。

「後で姫さまに礼の品が届けられるようです」

「……」

俺ではなく？ 俺ではなく？

そんな会話をしながら、春信は肩を落として、一の巫女の後ろを付いて行く。

上社本宮まであと少しというところで、うーんっと、一の巫女は両手を上に突き出し、背伸びした。

「ふう。ちょっとすつきりしました」

それは良かったですね、と皮肉を言うような気力も根性も春信にはない。すぐはそうでもなかった打撲がジンジンと痛み始めているし。

つつつと、春信の横。

一の巫女 が肩と肩が触れあつくらしいの距離で歩調を合わせてくる。

「それに、何となく、分かりました。あなたというものが」

下からのぞき込むように 一の巫女 が春信に笑いかける。

「あなたは、そのままです宜しいと思います」

春信は足を止め、彼女を見つめ返す。

彼女も足を止める。

彼女の唇が、言葉を紡ぐ。

「馬鹿は死ななきゃ治らないので、あきらめます」

言い置いて、一の巫女 は歩いて行く。

その足取りは弾むように軽やかだ。

春信は苦笑いを浮かべた。

機嫌は直ったようだが、まだまだ許してくれないようだった。

姫の宮 に帰ると、顔を腫らした春信に、姫さまが大騒ぎになった。

一の巫女 が全く説明してくれないので、春信は必死に説明し姫さまをなだめ落ち着かせた。

夕方頃、 姫の宮 に米や味噌など大量の物品が届けられ、 姫の宮 の財務を担当する 三の巫女 は大はしゃぎだった。

その時春信は濡れた手ぬぐいで患部を冷やすという、姫さまの看病を受けていた。

そして夜。

鳴子が鳴った。

姫の宮の最後の郭、通称 本丸 は男子禁制である。

用がある時は本丸門の呼び縄を引けば、屋内の鳴子が鳴るようになっている。

「来客？ 俺に？」

客は、今日殴り合ったあの五人だった。

惣領家から無事に家督の継承を認められた。死んだ父や兄たちにも、褒美が増された。これもあんたのおかげだ。ありがとう。

春信は泣いた。

彼らも泣いた。

泣きながら抱き合い、礼を言われ、祝福の言葉を伝えあつ。

この日、春信に、五人の友達ができた。

011、 姫の宮 評定

ふすまの閉め切られた部屋の真ん中に、一本のろうそくが置かれている。

その小さな頼りない灯りを囲むようにして、 姫の宮 の姫巫女たちが円に座っている。

まるで怪談でも始めそうな雰囲気である。

が、これから行われるのは怪談ではなく、 姫の宮 評定だった。それも定例ではなく、緊急の。

定例 姫の宮 評定とは、 姫の宮 の方針や、仲間内の約束事、様々な問題を話し合う重要にするつもりだった評定で、毎月一回開催されている。

しかし共同生活しているたった八人の集まりである。

毎日顔を合わせているし、重要なこともそうでないことも、必要事項は平素から遠慮無く話し合われている。

そんなわけで、定例評定の議題はだいたい下らない要件になり、夏場などにはいつの間にか怪談話に移行してたりと、情性感に満ちあふれている。

それに対し緊急の評定は、まさに緊急時のみ、その解決を目指し話し合う評定だった。

前回開かれたのは、春信が迷い込んだ夜。

疲れ切っていた春信が寝入った後、一同が集まって対応を協議していた。

その時の評定で、春信の面倒を 一の巫女 に一任する事、二人

が恋仲を装う事、姫さまの当分の外出禁止などが決定されたのである。

姫さまとしては、一度納得したことではあるが、もう少し春信と一緒に居たいし、一の巫女は必要以上に春信に引っ付きすぎだと思つので、そこを今日の評定で改めさせるつもりだった。

姫さまが、まず評定の開始を宣言した。

「これより 姫の宮 緊急評定を開きます。一の巫女 が悪いと思つ人！」

ぱつと姫さまと 五の巫女 が手を上げる。

「……………姫さま、結論の前に 一の巫女 の説明を聞きませんか？」

三の巫女 が提案する。

春信を看病していた時に、姫さまが本人に事情を聞いていた。が、要領を得ない。

男には戦わなきゃいけない時があるんですとか、誰が悪いわけでもないとか、一の巫女 さんには何も責任がないとか、自分は頑丈だから大丈夫ですとか、心配かけてすいませんとか。

姫さまも春信相手だとあわあわして、大丈夫です、大丈夫です、心配ありません、とか言いながら膝枕とかして、いつの間にか向この世界での春信の思い出話とか聞いていた。

まったりしていたら喧嘩相手が尋ねてきて、あわあわしている内に春信が出て行って仲直りして帰ってきた。

今日の評定は、春信の怪我也含めた一連の説明、今後のことで大

切な話があると、一の巫女 が招集したのである。諏訪頼重名義で送られてきた大量の物品も理由不明である。日々の収支に四苦八苦していた 三の巫女 としては、詳しく知りたくて仕方なかった。

「本当に緊急なら、戻ってすぐに開いていたはずですよ。わざわざ深夜に寝ているところを起こして開こうとするのは、身の入った議論をしたくないからです。きっと 一の巫女 に都合の悪い話で、説明だけして 一の巫女 は逃げるつもりですよ」

姫さまが指摘した。

みんな明日も生活があるのだ。深夜に長々と評定してもらえない。実際 二の巫女 と 四の巫女 は今にも船をこぎそうだ。

「いえ。帰宅して直ぐは姫さまが取り乱しておられたので。落ち着かれるのを待ってお話ししようと少し横になっていたら、寝過ごしてしまいました。他意はありません」

一の巫女 がしれっと答える。

「…… 一の巫女 が悪いと思います！」

姫さまと 五の巫女 が手を上げる。

他の巫女は、普通に面倒くさそうだった。

とつとつ 一の巫女 の話を聞いて、寝たいのだ。

ふてくされたように姫さまは、

「だいたい 一の巫女 が全て責任を持つと言うので、骨さまのことは全て任せました。それなのに骨さまは怪我をして帰ってきまし

た。これは 一の巫女 の監督責任です。 一の巫女 はまず謝るべきだと思います」

「申し訳ありませんでした」

素直に、というか、どうでもよさそうに 一の巫女 が頭を下げた。

「それでは、罰として 一の巫女 と骨さまの恋仲設定を解消します」

間髪入れず姫さまが申し渡す。まさに結論ありきだった。

「それじゃ次の恋人は私が……きゃっ」

目を擦りながら主張した 二の巫女 を姫さまが両腕で突き飛ばした。

「そんじゃ私が」

手を上げた 五の巫女 を突き飛ばそうしてかわされ、姫さまがうつぶせに倒れる。むーと姫さまがうなり、 五の巫女 を見上げる。 五の巫女 は鼻の下を擦りながら得意そうだ。

二の巫女 も 五の巫女 も本気ではなく、姫さまをからかっているだけである。

二の巫女 と 五の巫女 は、諏訪総領家に従属する武家の娘である。変な噂が流れた時、実家に掛かる迷惑は、諏訪総領家とも対等に近い諏訪大社の神職・守矢一族の比ではないし、一族会議で問い詰められて、しらばくれるほどの胆力も二人にはない。

一の巫女 が特殊なのである。
だからこそ、春信のことも含めて対外的な揉め事の処理は 一の巫女 に一任されているし、姫さまも最終的には 一の巫女 の決定に逆らえなかった。

「そうですね。姫さまがそう仰るなら、明神御剣さまとの恋人設定は解消いたしました。当初の目的は十分に果たしましたので」

一の巫女 が告げる。

姫さまが目丸くして驚く。

春信は怪我をしながらいつもより幸せそうだし、喧嘩相手は謝りに来たし、一の巫女 は平然と寝ていたし、送られてきた大量の物品も、諏訪総領家に非があつた証拠と言える。

だから事件は後を引かず終わったものと思つていた。
話し合うことなど、事後報告以外無いはずだと、姫さまは高をくくっていた。そんなわけで、この機会に少しでも待遇改善して貰おうと、駆け引きのつもりでだだを捏ねていたのであるが。あっさり
と 一の巫女 が要求をのみ、耳慣れない名を出した。

「みょうじん、みつるぎ、さま？ もしかして、骨さまのことですか？」

じくりと、一の巫女 が頷く。

「……どういふことですか、絆？」

居住まいを正して姫さまが尋ねる。

「では、その事も含めて、少し長くなりますが、事のあらましを順

に説明いたします」

みんなが聞く体勢になったのを確認して、一の巫女は五人の男に絡まれたところから、話し始めた。

一の巫女の話が、伊豆入道に直談判した所まで進む。

一の巫女の激しい抗議に、伊豆入道は煩そうに耳の穴をほじくり、「ふん」と鼻を鳴らしてから、

「で、あの男は何者だ？ 天から参った、というのは本当か？」

逆に問い詰めてきた。

「そのように姫さまと当人は仰っています」

「何もない虚空から現れたというのは本当か？ 目撃した者は居るのか？」

「……姫さまと、蓮池雷太が確かに見たと申しています」

「ふうむ」

「ご理解頂けたのなら馬鹿な決闘を止めてください。あの者は姫さまの恩人で、姫さまの客人です」

「かかかか」

「笑い事ではありません！」

だんつと一の巫女が威圧するように足を踏みならす。

取り巻きの男達（特に決闘している五人の身内）が、びくりと身をすくませる。

しかし伊豆入道は涼しい顔だ。一の巫女を一瞥することもなく、ずっと眼下に視線を注いでいる。

「ほう、動きが良くなってきたな」

伊豆入道の声に、一の巫女も春信たちに目を移す。

二人目の男が腕を打たれて引き下がりが、二人の男が同時に春信に挑もうとしていたところだった。

一の巫女が春信の剣捌きを見たのは、これが初めてである。

普段から背筋を伸ばして姿勢の良い春信だが、それは木刀を持つても変わらない。

相手の攻撃をまるで予測していたかのように楽にかわして、禅僧が活を入れるかのように木刀を加減して打ち込んでいく。

五人に取り囲まれても、落ち着いていた。それどころか、

「おおおおおおおおおっ！！！！」

辺り一帯の空気が震えるような、絶叫。

ぶわりと、春信の身体から、白い炎が立ちのぼった。

次の瞬間、「めんっ」とかけ声と共に春信の身体が城南丈太郎友通の目前にあり、木刀が丈太郎の頭上で、静止していた。

取り巻く侍たちが押し殺したどよめきを上げる。

停止していた春信たちも動きだし、決闘が再開される。白い炎は、幻だったかのように消えてなくなっている。

「見えたか？」

「何が、でしょうか？」

「白い炎と、太刀筋じゃ」

「……………白い炎は一瞬だけ見えたような気がします。太刀筋は見えませんでした」

一の巫女 と伊豆入道の会話の後、今まで黙っていた侍たちも、小声で私語を交わし始めた。途切れ途切れに聞こえる声は、「見えた」とか「見えなかった」とか「本物なのか」とか「何かが駆け抜け怖気が走った」とか。

丘の下では危なげなく春信が五人の男を捌いている。

がたりと、伊豆入道が音を鳴らして床几から立ち上がった。

私語が途絶える。

伊豆入道は、一同を見渡し。

「見ての通りじゃ。どうやら姫の申すとおりで間違いはないらしい。彼の者の名は、明神御剣。諏訪大明神の眷属にして、諏訪大明神が魔を祓う際に振るわれる破邪の神剣。その御剣が化身されたお姿よ」

「おおおっ」

と、男たちがどよめく。唯一の女性、一の巫女 は険しい顔で伊豆入道を睨み付ける。全く持って、初耳の設定なのである。

「わしも少々疑っておったがあ白い後光に剣の冴えを見て確信したわ。『今の乱れた戦国の世を正すため、この御剣をもって諏訪大明神の神威を広めよ!』 さや姫が視た夢は、間違いなく諏訪大明神のご神託よ」

一の巫女 の冷たい視線を無視して、伊豆入道はてきぱきと侍達に指示を出す。

伊豆入道の合図か、それが無くてもこれ以上の喧嘩は無益と判断

したなら、適当なところで止めに入っている。そんな内容だ。
三人の側近を残して、侍たちが丘の下へと降りていく。

「まったく」

人払いが済んでから、伊豆入道は、ぼやいた。

「こんな決闘を始めよってからに。迷惑な話じゃよ。のう？」

「殴って良いですか？」

一の巫女 が握り拳を作って、伊豆入道に向き直る。

「かかかつ」

「殴りますよ？ 本当に？ 私は？」

この場に残った三人の側近たちは、食い入るように眼下の決闘を見入っているので、本当に殴れそうだ。

慌てたように伊豆入道は、顔の前で両手を振ってから、早口でまくし立てた。

「半分は冗談だが、半分は本気じゃ。あの男を取り巻く噂は知っておろう。あの男への疑いや妬みは、あの男を匿う 姫の宮 への不信になる。 姫の宮 への不信は、 姫の宮 を黙認している惣領家への不満となる。不満の根は早く抜くに限るし、少しの根も残すことは出来ん。どこぞにつけ込まれる恐れがある」

「……」

「今まで此処にいた五人がその噂の中心よ。この決闘はその対処も

かねて居る」

「……兼ねている、と言うことは本当の目的は別にあるのですね？」

「あの男は、いつまで諏訪にいるつもりじゃ？」

「……」

「答えられんのか？ こんな喧嘩の原因となる男を、いつまでも諏訪においてはおけんぞ？」

自分はちよくちよく質問を無視するくせに、一方的な物言いをする伊豆入道。一の巫女は目をつむって首を横に振ってみせた。

「追い出すとでも？ ご冗談を。そんな気はないくせに。本当の目的は何ですか？ 無駄話はいいい加減止めて、単刀直入にお願いします」

「……ふん。無駄話ではなく、いつまで諏訪にいるのかは、純粹に知っておきたいだけなのだ……その口ぶりではおぬしも聞いておらんようだな」

一の巫女は一瞬不機嫌な顔をしたが、無言。事実だけに否定も出来ないが、声に出して肯定する気もない。

「本物が偽物か確認しなかった。……いや、本物を演じれるか、すぐに化けの皮が剥かれるまがい物か、それを確認するつもりだった」

淡々と、伊豆入道が目的を語る。視線はひたすら、眼下の春信に注がれている。

「あの男を諏訪のために利用したい。さや姫が諏訪を守るために招

いた大明神の眷属としてな。呪いを打ち消す奇跡とする。見返りとして、姫の宮での滞在を黙認ではなく、公認する。あの男に掛かる費用はこちらで用意する。仕官しろとも言わん。それらしく振る舞ってくれるだけでいい。うまく演じてくれたならば、いずれは姫の宮をあの男の屋敷にくれてやってもよい」

「姫の宮を……ですか？」

「これすらも呑めぬと言うのなら、事情を知りたい。出来る限り相談に乗る。姫の宮に持ち帰ってようく当人とも話し合ってくれ」

「……」

「それにしてもとんでもない腕よの。あの寸止め。あの速さで当たれば頭蓋など容易に砕かれておつたろうに。五人を相手に一撃も入れさせることなく体勢を崩すこともなく。大きな怪我をさせることなくあしらい続けている。八兵衛など足下にも及ばん。………本物かも、しれんのお」

しみじみと、伊豆入道が呟く。

一の巫女も、決闘に視線を向ける。
今更止める気はなくしていた。

眼下の決闘はすでに決闘ではなく、熟練の剣士が若輩者を指導しているようにしか見えない。

が、春信が木刀を投げ捨て様相が一変する。

五人の男達も次々と木刀を投げ捨て、殴り合いの喧嘩が始まる。

それ以降の結構長い喧嘩の間の伊豆入道たちとのやりとりは全て省略して、

「私はすぐ止めさせるように、伊豆入道さまにお願いしたのですが……」

と沈痛そうな表情を作って、一の巫女は事の説明を締めくくり、

「願ってもない話かと思えます。彼が本当に天から参られ、ミシヤグジさまを探しているのなら、惣領家と諏訪大社との良好な関係は助けになります。それに、いつ姫さまの婚儀がまとまるか分かりません。そうなれば、姫の宮は役目を終え、彼の居場所もなくなります。姫さまが彼を庇える今の内に、姫さまに頼らない足場を彼に築かせるべきです。………あの男、面倒を見る人が居なくなれば、すぐ野垂れ死にますよ？」

自らの意見を述べた。

結局この日はこれで解散となり、明日姫さまと当人が話し合ってから結論を下すことになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0988v/>

諏訪の神さま

2011年10月3日11時56分発行